

正直古墳群調査保存事業

正直古墳群

—第2次発掘調査報告—

平成31年3月

福島県郡山市教育委員会

正直古墳群調査保存事業

正直古墳群

—第2次発掘調査報告—

平成31年3月

福島県郡山市教育委員会

正直古墳群調査保存事業

しょう じき こ ふん ぐん
正 直 古 墳 群

—第2次発掘調査報告—

平成31年3月

福島県郡山市教育委員会

序 文

郡山市内には、埋蔵文化財包蔵地として1,183箇所が福島県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されております。このことは、古くからこの地に人々が営み、人やもの、情報などの交流が継続して執り行われてきたことを物語っております。しかし、近年の活発な開発によって消滅の危機に瀕する遺跡もあり、大地に刻まれた歴史と言える埋蔵文化財を保護するために、試掘調査及び発掘調査を行い、遺跡の保護・保存を図っているところです。

正直古墳群は、市内でも重要な遺跡の一つであり、現在は40余基の古墳が確認されており、往時は50基以上の古墳が群を成していたと考えられております。昭和24年から開畑時の発見や宅地開発によって古墳の調査が随時行われ、その調査成果から、古墳時代中期の概ね5世紀代を中心とする古墳群として評価を受けてまいりました。しかし、近年の開発により未調査のまま消失したものや一部欠損してしまった古墳もあり、古墳の保護・保存が喫緊の課題となっているところです。

こうした状況の下、古墳群の保護・保存を図るため、平成29年度から国庫補助事業として、古墳群の内容把握や実態解明のために、古墳群の中で中核とされる古墳の調査を進めているところです。今年度も昨年に引き続き正直21号墳の調査を行い、2棺並列となる木棺直葬の埋葬施設が墳頂部から検出され、周溝等から出土した壺形埴輪片から、古墳時代前期末から中期初頭に築造された円墳であることが判明いたしました。これまで調査してきた円墳では最大規模であり、古墳時代前期から中期にかけて継続して古墳が築かれていたことも明らかとなりました。今後は、正直古墳群の中で最も古い築造とされる前方後方墳型の正直35号墳の発掘調査を進め、古墳群の実態解明を進めてまいりたいと考えております。

本書は、平成30年度の調査成果を第2次発掘調査報告としてまとめたものでありますが、多くの皆様に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助となりますことを願うところです。

結びに、調査にあたり多大なる御協力を賜りました地権者の皆様、田村町正直行政区長様、地元の皆様、発掘調査に従事されました皆様方、発掘調査の御指導をいただきました正直古墳群の調査保存に係る懇談会の委員の皆様には厚く御礼を申し上げます、序文といたします。

平成31年3月

福島県郡山市教育委員会

教育長 小野 義 明

調 査 要 項

遺 跡 名 正直古墳群（しょうじきこふんぐん）
所 在 地 福島県郡山市田村町正直字除古・竹ノ内ほか
調 査 期 間 平成30年 5 月28日～平成30年 9 月28日
調 査 主 体 者 福島県郡山市教育委員会（教育長 小野 義 明）
調 査 担 当 者 公益財団法人郡山市文化・学び振興公社（代表理事 服 部 健 一）
調 査 保 存 菊 池 芳 朗（国立大学法人福島大学行政政策学類教授）
懇 談 会 委 員 藤 沢 敦（東北大学総合学術博物館館長）
柳 沼 賢 治（国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授）
玉 川 一 郎（福島県考古学会会長）
指 導 機 関 文化庁（森 先 一 貴） 福島県教育庁文化財課（渡 邊 貴 勝）
調 査 員 高 田 勝
調 査 補 助 員 吉 田 イ チ 子
助 言 青 山 博 樹 神 林 幸 太 郎 木 幡 成 雄 鈴 木 功 日 高 慎 吉 田 秀 享
協 力 遠 藤 貞 一 柳 沼 義 一 平 栗 慶 一
平 晋 建 設 株 式 有 限 公 司（代表取締役社長 高 橋 健 二）

例 言

1. 本書は、福島県郡山市田村町正直字除古・竹ノ内ほかに所在する正直古墳群の調査保存事業に係る第2次発掘調査報告書である。
2. 正直古墳群は、正直B遺跡の範囲内に点在するため『福島県遺跡地図』(1996 福島県教育委員会)には同遺跡名で登録されている。しかし、昭和39年に刊行された『福島県史』第6巻資料編1に「正直古墳群」として登場し、昭和47年に刊行された『郡山市史』第8巻資料編(上)においても同名称が継承されている。また、関係者の間では現在もこの名称が広く使われおり、今回この名称を用いることとした。
3. 本調査は、郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間に締結された委託契約に基づき、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社が実施した。
4. 現地調査から報告書刊行までの費用は、国庫補助金と市費より成る。
5. 本書は、公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センターが編集し、郡山市教育委員会が発行した。
6. 本書の執筆は、第2章第1節を郡山市文化スポーツ部文化振興課の佐藤常雄が担当し、第1章第2節は佐藤と高田が、その他は高田が行った。ただし、第1章第2節のうち、正直古墳群の調査概要については、図を含めてその多くを平成8年度に刊行された『正直B遺跡－発掘調査報告書－』から転載し、正直15号墳の部分のみ高田が行った。
7. 本書に掲載した遺構図と遺物図は、高田と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター臨時職員の吉田イチ子・橋本明子・今泉淳子が作成した。
8. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は、高田が撮影した。また、空中写真は、日本特殊撮影株式会社に委託してドローンで撮影した。
9. 本書に掲載した1/50,000地形図(第1図)は、国土交通省国土地理院発行の地形図を複製したものである。また、1/5,000地形図(第2図)は、国営総合農地開発事業母畑地区の計画平面図(1/1,000)を縮小複製したものである。
10. 測量基準点の座標値は、世界測地系平面直角座標第IX系による。また、遺構図の方位は、座標北を示す。
11. 調査に関わる記録・資料・出土遺物は、郡山市教育委員会が保管する。

目 次

序 文
調査要項
例 言

| | |
|-------------------|----|
| 第1章 位置と環境 | 1 |
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 1 |
| 第2章 調査の経緯 | 21 |
| 第1節 調査に至るまで | 21 |
| 第2節 第1次発掘調査の目的と成果 | 25 |
| 第3節 第2次発掘調査の経過 | 26 |
| 第3章 調査報告 | 30 |
| 第1節 周溝・墳丘下部 | 30 |
| 第2節 埋葬施設 | 44 |
| 第3節 遺構外出土遺物 | 46 |
| 第4章 まとめ | 48 |

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

| | |
|--------------------------|-------|
| 第1図 正直古墳群の位置と市内の主要古墳時代遺跡 | 3・4 |
| 第2図 正直古墳群・正直B遺跡と周辺の地形 | 11・12 |
| 第3図 正直11・12・13号墳 | 13 |
| 第4図 正直30・36号墳（1） | 14 |
| 第5図 正直30・36号墳（2） | 15 |
| 第6図 正直35号墳 | 16 |
| 第7図 正直15号墳（1） | 17 |
| 第8図 正直15号墳（2） | 18 |
| 第9図 正直20・21・43号墳周辺測量図 | 22 |
| 第10図 第1次発掘調査終了後の正直21号墳 | 23・24 |
| 第11図 正直21号墳トレンチの配置と遺構 | 27・28 |

| | | |
|------|-----------------------|-------|
| 第12図 | 第2トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図 | 31 |
| 第13図 | 第2トレンチ出土遺物 | 32 |
| 第14図 | 第3トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図 | 34 |
| 第15図 | 第3トレンチ出土遺物 | 35 |
| 第16図 | 第4トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図 | 36 |
| 第17図 | 第4トレンチ出土遺物 | 37 |
| 第18図 | 第5トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図 | 38 |
| 第19図 | 第5トレンチ出土遺物 | 39 |
| 第20図 | 第6トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図 | 41・42 |
| 第21図 | 第6トレンチ出土遺物 | 43 |
| 第22図 | 埋葬施設平面図・断面図 | 45 |
| 第23図 | 第2次発掘調査遺構外出土遺物 | 46 |
| 第24図 | 第1次発掘調査出土遺物 | 47 |

写真図版目次

| | |
|-----|---|
| 図版1 | 正直古墳群の位置（国土地理院の空中写真 1947 米軍空撮） |
| 図版2 | (1) 正直古墳群・正直B遺跡遠景（南より） (2) 調査地区全景（上空より） |
| 図版3 | (1) 第2トレンチ全景（南西より） (2) 第2トレンチ周溝断面（南東より） (3) 第2トレンチ墳丘面旧表土層（南より） (4) 第3トレンチ全景（北東より） (5) 第3トレンチ周溝断面（北東より） (6) 第3トレンチ周溝断面（南東より） |
| 図版4 | (1) 第4トレンチ全景（西より） (2) 第4トレンチ周溝断面（南西より） (3) 第4トレンチ墳丘面旧表土層（西より） (4) 第5トレンチ全景（東より） (5) 第5トレンチ4号溝跡検出状況（北より） (6) 第5トレンチ南壁断面（北西より） |
| 図版5 | (1) 第6トレンチ全景（北より） (2) 第6トレンチ周溝断面（北西より） (3) 第6トレンチ墳丘面旧表土層（北より） (4) 第1埋葬施設掘方確認状況（北西より） |
| 図版6 | (1) 第2埋葬施設掘方確認状況（北西より） (2) 第1・2埋葬施設掘方確認状況（上空より） |
| 図版7 | 出土遺物（1） |
| 図版8 | 出土遺物（2） |

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡の所在する郡山市は、福島県のほぼ中央部に位置する。市域の東西は、阿武隈山地西縁丘陵地から奥羽山脈中の猪苗代湖南東部におよび、中心市街地は郡山盆地内にある。人口33万人余りを数える県内屈指の商・工業都市で、平成9年4月1日から中核市へ移行している。気候的には、比較的穏やかな内陸性の気候であるが、奥羽山脈中の湖南町や熱海町西部は冬季間の積雪量がかなり多い。

市街地のある郡山盆地は、安達郡大玉村・本宮市付近から須賀川市・白河市付近まで続く南北に長い山間盆地の一部である。この盆地は、第三紀末のグリーンタフ造山期に阿武隈山地と奥羽山脈との間に起こった相対的沈降作用によって形成されたもので、縁辺に断層も認められることから断層盆地の特性も併せ持つ。基盤は、花崗岩類とそれを覆う第三紀層並びに白河石英安山岩質溶結凝灰岩から成り、盆地床の一部でこの基盤は300～400m高度の丘陵地を形成している。

盆地内を南北に貫流する阿武隈川は、西の奥羽山脈から笹原川・逢瀬川・藤田川・五百川、東の阿武隈山地から谷田川・大滝根川・桜川などの支流を集めて盆地東縁部を北流している。これらの大小河川の浸食・堆積作用により、盆地の大半を占める西岸の地域では上・中流域に緩やかな傾斜の扇状地が発達し、下流域では東西方向に延びる複数列のなだらかな台地を形成している。また、東岸では南東部の阿武隈川と谷田川に挟まれた地域に段丘地形や沖積低地をみることができ、谷田川東岸の田村町大善寺以北では、阿武隈山地に続く丘陵が樹枝状に開析され、複雑な地形を形成している。

今回調査を行った正直古墳群は、郡山市田村町正直に所在し、JR郡山駅の南約6kmに位置する。付近は郡山盆地の南東部にあたり、西側を阿武隈川、東側を谷田川が流れ、北側には両河川によって形成された沖積低地が広がっている。古墳群は、両河川に挟まれた通称守山台地と呼ばれる砂礫台地の北端を占める正直B遺跡と複合し、標高約240～250mの上～中位段丘面に築造されている。北側には沖積低地が広がり、東と西は沖積低地から入り込む開析谷に画されている。現地目は、山林と畑地である。

第2節 歴史的環境

昭和50年代以降、郡山市内においては、郡山東部地区の国営総合農地開発事業や東北自動車道・東北新幹線の建設、大規模な土地区画整理事業や多目的公園の建設等の大型開発に伴い、遺跡の発掘調査が進められ、数多くの貴重な資料が蓄積され、古墳時代の遺跡の広がりや時間的な推移が具体的に解明されてきている。ここでは、市内で発掘調査された古墳時代の遺跡を中心にその概要を記す。

東丸山遺跡 安積町成田字東丸山・清水台 註1

ほ場整備事業に伴い、昭和49年度に発掘調査が行われた。また、昭和59・60・62年度には、多目的公園「郡山カルチャーパーク」建設に伴い、大規模な発掘調査が行われた。両調査では、前期6棟、後期

第1章 位置と環境

中葉2棟、同後葉20棟の竪穴住居跡の他、縄文時代前期や平安時代の竪穴住居跡が検出されている。また、東西約100m、南北約60mの範囲から、前期の方形周溝6基、前～中期の土坑墓4基、中～後期の円形周溝墓6基が発見され、9号方形周溝墓からは、前期に比定し得る鉛製のペンダント（東日本では最古の鉛製品と推定）が出土している。

山中日照田遺跡 田村町大善寺字中山田 註2・3

大善寺古墳群と複合する遺跡である。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和56年度に大規模な発掘調査が行われた。また、平成10年には、無線基地建設に伴って小規模な発掘調査が行われた。昭和56年度の調査では、前期の竪穴住居跡40棟の他、中・後期、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが多数検出されるとともに、前期の方形周溝墓や円形周溝墓も発見されている。また、平成10年の調査では、中期後葉の竪穴住居跡が2棟検出されている。山中日照田遺跡は、古墳時代前・中・後期を通して阿武隈川東岸地域の拠点的な集落跡と考えられている。

北山田遺跡 田村町上行合字北山田・中山田 註4～7

北山田古墳群と複合する遺跡である。公立学校敷地拡張工事に伴い、昭和60年度に発掘調査が行われた。また、昭和62・63年度には、国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。昭和60・63年度の調査では、古墳時代の遺構は確認されなかったが、同62年度の調査では前期5棟、中期9棟の竪穴住居跡が検出されている。いずれの調査区でも古墳の所在が確認されたことから、昭和60年度は古墳1基、同62年度は古墳2基、同63年度は古墳3基の調査が併せて行われている。

宮田A遺跡 田村町上行合字宮田 註8

国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和59年度に発掘調査が行われた。前期の方形周溝墓1基と中期中葉の方形周溝墓1基の他、方形周溝墓の可能性のある溝跡、時期不明の掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されている。

徳定A・B遺跡 田村町徳定字塚ノ越・芋干場 註9～12

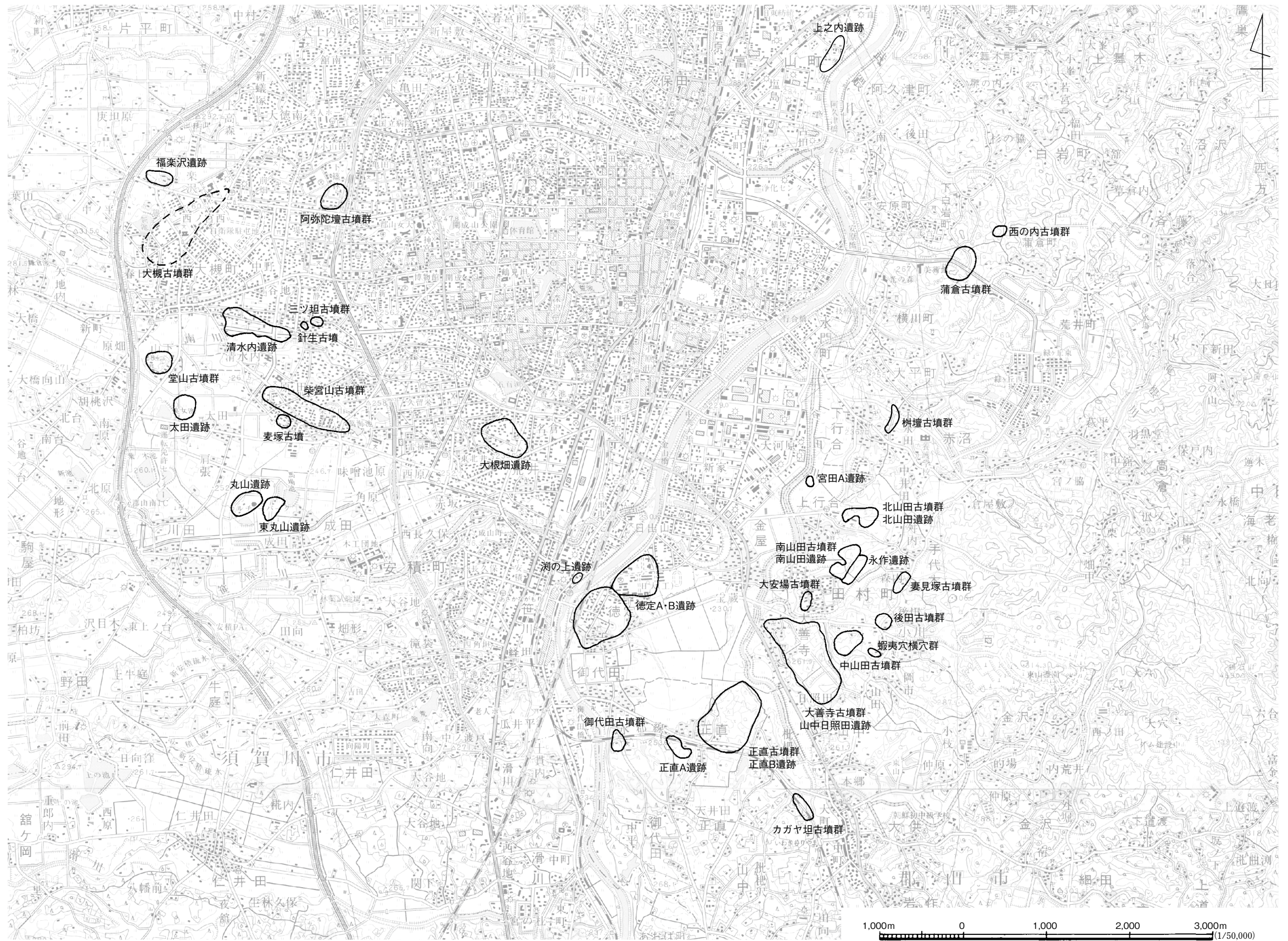
東北新幹線敷設工事に伴い、昭和47・49・50年度に発掘調査が行われた。また、平成17・20～24年度には、土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われた。両調査で検出された遺構の多くは、後期前半と奈良・平安時代の竪穴住居跡であったが、土地区画整理事業に伴う平成24年度の第6次調査では、前期の竪穴住居跡が2棟発見されている。

上之内遺跡 富久山町福原字上之内・陣場 註13

民間の宅地造成工事に伴い、平成7年度に発掘調査が行われた。前期の竪穴住居跡2棟の他、中世の集水遺構、溝跡、ピットなどの遺構が検出されている。

清水内遺跡 大槻町字人形垣東・上中谷地・中谷地、御前1・5・6丁目 註14

土地区画整備事業に伴い、平成7年度から同10年度にかけて大規模な発掘調査が行われた。前期1棟、鍛冶工房跡7棟を含む中期106棟の竪穴住居跡の他、奈良・平安時代の竪穴住居跡や中世の屋敷跡などが検出されている。また、中期の祭祀関連遺構として、一辺の長さが最大52mを測る矩形の区画遺構や祭祀遺物廃棄場、旧河川跡の祭壇状木組み遺構などが検出されている。中期の竪穴住居跡は、カマドの有無や出土した土師器の組成などから前・中・後葉の3時期に分けられ、前・中葉が主体を占める。清水内遺跡は、阿武隈川西岸における中期の中心的な集落跡と考えられている。



第1図 正直古墳群の位置と市内の主要古墳時代遺跡

大根畑遺跡 安積町荒井字大根畑 註15・16

土地区画整備事業に伴い、昭和62年度から平成3年度にかけて発掘調査が行われた。4次わたる調査で、主に後期前半と奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認されている。平成元年度に行われた第3次調査では、中期前葉の竪穴住居跡も2棟検出されている。

永作遺跡・南山田遺跡 田村町手代木字永作、田村町上行合字南山田 註17～19

両遺跡は、ともに国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。昭和61年度の永作遺跡の調査では、中期後半の竪穴住居跡が30棟検出されている。また、平成元年度の南山田遺跡の調査では、同じく中期後半の竪穴住居跡が78棟発見されている。鉄滓・羽口・炉・鍛造剥片などがみつかった竪穴住居跡が、両遺跡ともに2棟ずつあり、これらは鍛冶工房跡と考えられている。また、永作遺跡では、1棟の竪穴状遺構から石製模造品の原石や作りかけの剣形石製模造品が出土しており、この遺構は石製模造品の製作工房跡と考えられている。さらに、両遺跡では、この時期としては珍しい須恵器が比較的多く出土している。同一丘陵上に隣接して所在する永作遺跡と南山田遺跡は、主たる遺構の時期や内容がほぼ同じであることから、中期後半における阿武隈川東岸地域の中心的な集落跡のひとつと考えられている。

正直A遺跡 田村町正直字蓮沼 註20・21

古くから石製模造品が採集され、正直祭祀遺跡として知られた遺跡である。国営総合農地開発事業母畑地区に伴い、平成4年度に大規模な発掘調査が行われた。中期後半58棟、後期後半1棟の竪穴住居跡の他、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが検出されている。中期後半の竪穴住居跡の中には、大量の石製模造品やその未成品・剥片などが出土したものが1棟あり、この遺構は石製模造品の工房跡と考えられている。また、屋外で土師器や石製模造品が集中して出土した地点が3か所検出され、これらは中期後半の祭祀跡と考えられている。正直A遺跡は、正直古墳群と同一台地上の南西至近距離にあり、同古墳群の築造に関わる集落のひとつと考えられている。

太田遺跡 大槻町字太田北・北地藏谷地 註22

昭和35年頃に遺跡の一部が開田され、その際多量の土師器が出土した。その破片の一部にモミ痕が観察されたことで、注目された遺跡である。県営ほ場整備事業に伴い、昭和48年に発掘調査が行われた。検出された遺構は竪穴住居跡11棟のみで、これらは1棟を除いて後期前半と考えられている。

丸山遺跡 安積町成田字丸山 註23

多目的公園「郡山カルチャーパーク」の建設に伴い、昭和62年度に大規模な発掘調査が行われた。後期前半の竪穴住居跡16棟の他、平安時代の竪穴住居跡や縄文時代前期の土坑などが検出されている。

三ツ坦古墳群 静町 註24

開発工事による削平を受けて、昭和59年2月に1・2号墳の緊急発掘調査が行われた。トレンチ法による墳丘と周溝の部分調査であったため主体部は確認されなかったが、周溝の状況と1号墳出土遺物から、ともに一辺16m前後の前期の方墳と考えられている。調査は行われなかったが、他に4基の円形周溝も確認されている。

大安場古墳群 田村町大善寺字大安場 註25・26

平成6年度の測量調査を受けて、平成8年度から同16年度にかけて保護・保存に向けた発掘調査が行

第1章 位置と環境

われた。前期後半の大型前方後方墳1基と中期後半の円墳4基が確認され、前方後方墳が国の史跡に指定されたことを契機として復元整備が進められ、現在では史跡公園となっている。前方後方墳である1号墳は、全長約83m、前方部2段、後方部3段の築成で、丘陵の突端を一部整形して構築されている。主体部は、長軸約10m、短軸約2mの長方形墓壇底面に粘土を貼って棺床としており、長さ約9m、幅約1mの割竹形木棺が安置されたと推定されている。副葬品は、腕輪形石製品、鉄大刀、鉄槍、鉄剣、鉄鎌、鉄斧、剣形鉄製品、刺突具状鉄製品などが出土している。他に墳頂部やくびれ部などから多数の底部穿孔壺が出土しており、これらは墳頂部に立て並べられたと考えられている。2号墳は径約15mで、墳頂西寄りから組み合わせ式の箱式石棺が確認されている。5号墳は径約12mで、主体部は未確認である。3・4号墳は半分以上が開発行為により大きく削平されているが、周溝の形状等から円墳と推定されている。1号墳は規模や出土品から、この地方の首長クラスの墳墓と考えられている。

大善寺古墳群 田村町大善寺字上野・上石切場 註27

山中日照田遺跡と複合する古墳群である。昭和20年代のはじめ頃、数基の古墳が発掘調査され、骨鏃などが検出されている。昭和47年には、郡山市教育委員会により削平された古墳の発掘調査が行われ、箱式石棺の主体部と人骨の一部が検出されている。また、山中地区では、耕作中、盛土を失った古墳から数振の直刀が掘り出されている。台地の周縁を取り巻くように古墳群が形成されており、中には埴輪を立てた古墳もあったようで、これまでに4か所の地点で中期後半の埴輪が採取されている。現在確認できる古墳は、墳丘が僅かに遺存するものや石室が残るものなどが数基のみとなっており、以前出土した土器や聞き取り調査の結果の他、山中日照田遺跡として調査した周溝墓群を加えれば、前期古墳から横穴式石室をもつ後期古墳まで、各時期の古墳が存在していた可能性が高い。

阿弥陀壇古墳群 大槻町字柏山 註28

土地区画整備事業に伴い、昭和53年度に発掘調査が行われた。当初は、墳丘が確認できた3基を調査する予定であったが、周溝のみが遺存するものが新たに2基発見され、最終的に方墳1基と円墳4基の調査となった。各古墳の時期は、方墳が中期前半、円墳が後期と考えられている。1号墳は一辺25m前後の方墳で、主体部は墳頂北寄りで検出された。竪穴式の墓壇内に棺の痕跡が確認できなかったため、直葬と考えられている。3号墳は、径約14mの円墳である。主体部は横穴式状で、壁面を粘土で構築した玄室に木棺が納められたと考えられている。6号墳は径18m前後の円墳で、主体部は掘方のみが検出された。凝灰岩の破片が多数出土したことから横穴式石室と考えられている。4・5号墳はどちらも墳丘が削平され、周溝のみが検出されている。径18～20m前後の円墳と推定されている。

北山田古墳群 田村町上行合字北山田・中山田 註29～32

北山田遺跡と複合する古墳群である。13基確認されている。公立学校敷地拡張工事に伴い、昭和52年度と同60年度に発掘調査が行われた。また、昭和62・63年度には、国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、大規模な発掘調査が行われた。方墳1基（1号墳）、帆立貝形古墳1基（2号墳）、円墳5基（3・4・10・12・13号墳）の計7基が調査されている。帆立貝形古墳は全長約24mで、主体部は2棺並列の木棺直葬、時期は中期中葉頃と考えられている。一辺10m前後の方墳は、周溝や主体部は検出されなかった。中期後半以降と推定されているが、盛土から鉄鎗やロクロ土師器がみついていることから、後世の塚跡との指摘もある。5基の円墳は径約14～21mで、いずれも帆立貝形古墳築造前後の時期

が想定されている。未調査の古墳6基は、現況ですべて円墳と推定されている。

南山田古墳群 田村町上行合字南山田 註33・34

南山田遺跡と複合する古墳群である。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴う南山田遺跡の発掘調査の際に、中期の円墳1基（南山田1号墳）と円形周溝3基が検出されている。円墳は径16m前後で、主体部は検出されなかった。周溝から、小型脚付把手付壺と呼ばれている陶質土器に似た特殊な土器が出土している。現在は、かぶつ壇古墳と呼ばれている円墳が1基遺存しているが、隣接する桜ヶ丘団地造成時に複数の古墳が破壊されたという聞き取りがある。

中山田古墳群 田村町大善寺字中山田 註35

細い谷を挟んで大善寺古墳群の北東に位置する古墳群である。径10～20m程度の円墳が11基確認されているが、発掘調査が行われていないので詳細は不明である。

妻見塚古墳群 田村町手代木字妻見塚 註36

妻見塚遺跡と複合する古墳群である。径10m前後の円墳が10基確認されている。中には、天井石や門柱石が露出しているものがあることから、横穴式石室を伴う後期の古墳群と考えられている。国営郡山東部地区総合農地開発事業に伴い、昭和60年度に妻見塚遺跡として発掘調査が行われた地区で、石室の底石と考えられる石組が2か所検出されている。

榎壇古墳群 田村町下行合字朝日舞 註37

下永田B遺跡と複合する古墳群である。径10m前後の円墳が11基確認されている。県道飯豊郡山線建設工事に伴い、昭和60年度に下永田B遺跡として発掘調査が行われた地区で、天井石と周溝のみが遺存する古墳が1基検出されたことから、横穴式石室を伴う後期の古墳群と考えられている。

御代田古墳群 田村町御代田字中林 註38

径10m前後の円墳が9基確認されている。昭和30年に、福島考古学会によりすでに露出していた横穴式石室の発掘調査が行われ、耳環1点と石製模造品が出土している。後期の古墳群と考えられている。

カガヤ坦古墳群 田村町守山字カガヤ坦 註39

22基の古墳が確認されている。発掘調査が行われていないので詳細は不明だが、方墳1基を含み、小型の前方後円墳ないし前方後方墳らしい高まりもみられる。時期は、前期～中期と考えられている。

福楽沢遺跡1・2号墳 大槻町字蝦夷坦 註40

弥生土器の散布地として注目され、昭和44年度に遺跡の内容把握のため行われた試掘調査の際に、隣接する複数のトレンチにまたがって検出された。両古墳ともすでに墳丘は削平されており、1号墳では径10m前後の周溝と横穴式石室の基底部分が調査され、2号墳では周溝の一部のみの発掘となった。両古墳の時期は、後期後半と考えられている。

麦塚古墳 大槻町字麦塚 註41

市の重要遺跡の記録保存を目的として、昭和35年に発掘調査が行われた。周溝の有無は確認されていないが、出土した埴輪の配列などから全長26m前後の前方後円墳と推定されている。主体部は、盗掘坑や一字一石経を埋納した経塚により大きく破壊されていたが、僅かに残る石室内から直刀片、耳環、鉄鏝など、墳丘中から円筒埴輪や家形・人物・器財などの形象埴輪が出土している。時期は、後期前半と考えられる。

第1章 位置と環境

淵の上1・2号墳 安積町笹川 註42

阿武隈川上流改修工事に伴い、昭和46年度に行われた淵の上遺跡の発掘調査の際に検出された。両古墳ともすでに墳丘は失われており、1号墳では周溝の一部と横穴式石室の基底面が調査され、2号墳は横穴式石室の基底面のみの発掘となった。玄室の平面形はともに胴張気味で、1号墳からは頭椎太刀や鉄製冑とそれに付属する小札などが出土している。時期は、後期後半と考えられている。

守山城跡三の丸1号墳 田村町守山字三ノ丸 註43

小学校体育館増・改築工事に伴い、平成22年度に行われた守山城跡の第5次発掘調査の際に検出された。墳丘はすでに失われており、横穴式石室の基底面と周溝の一部が調査された。石室底面から須恵器高坏・土製丸玉・土製勾玉・耳環・刀子・鉄鏝などが、周溝から円筒埴輪・須恵器甕などが出土している。周溝の半部以上が調査区外となっているため墳形は確定できないが、全長20m以上の前方後円墳と推定されている。時期は、後期前半と考えられている。

大槻古墳群 大槻町字西ノ宮西・新池下・御花畑 註44

すでに消滅した古墳群である。長くその位置や数が不明であったが、昭和13年に作成された分布図が公開された。この分布図には、多数の古墳とともに現在も位置を変えずに残っている池や道路も描かれている。また、前記した三ツ坦古墳群、阿弥陀壇古墳群、福良沢1・2号墳などの発掘調査が行われた古墳も記載されていることから、当時の古墳分布の様子をかなり正確に示している。これによれば、現在の大槻町字西ノ宮西・新池下・御花畑辺りに100基前後の古墳があったとみられる。なお、この分布図には、詳細は不明ながら昭和45年に1基の調査が行われた堂山古墳群、現在では宅地化により墳丘が確認できない柴宮山古墳群なども記載されている。

針生古墳 静町 註45

多数の古墳が消滅した大槻地区の中で、破壊を免れた古墳として郡山市の史跡に指定されている。昭和25年に発掘調査が行われているが詳細は不明である。後期の円墳と考えられている。

蒲倉古墳群 蒲倉町字カチ内・横川町字大谷地ほか 註46～52

古墳群の内容把握のため、昭和47年度に一部の古墳の発掘調査が行われた。また、平成3年度には、古墳公園として保護・保存、整備・活用を図るため、分布調査・試掘調査が行われた。さらに、平成9・10・11・12・19・20年度には、基礎資料収集を目的として合せて21基の発掘調査が行われた。これらの調査により、墳丘が遺存していないものも含めて71基の所在が確認され、径5～10m前後の円墳群であること、主体部が遺存するものは横穴式石室であること、追葬が行われたものがあること、追葬時に石室の前で火を焚いたものがあることなどが明らかになった。築造時期は、後期後半と考えられている。

西の内古墳群 蒲倉町字西の内 註53

蒲倉古墳群の北東約500mの丘陵上に位置する。現在、10基の存在が確認されている。発掘調査が行われていないので詳細は不明であるが、墳丘規模や石室の状況が蒲倉古墳群と類似していることから、同古墳群とほぼ同時期の築造と考えられている。

蝦夷穴横穴墓群 田村町小川字下田 註54

市内唯一の横穴墓群である。市単独農道改良工事に伴い、平成13年度に発掘調査が行われた。横穴墓は以前から11基確認されていたが、この調査では、法面工事で新たに発見された2基と墓群前面の農道

部分が対象となった。2基の横穴墓はともに盗掘を受けていなかったため、玄室内から方頭太刀、太刀、刀子、鉄鏃、ガラス製小玉、鉄鏝などが出土している。農道部分では複数の溝跡が検出され、これらは墓域を区画する溝や横穴墓に通じる墓道と考えられている。時期は、後期後半と考えられている。

正直古墳群 田村町正直字除古・竹ノ内外 註55～60

正直B遺跡と複合する古墳群である。昭和39年に初めて分布図が作成され、これにより墳丘を失った古墳2基を含めて35基が知られた。その後、昭和56年度の30号墳発掘調査、平成3年度の35号墳測量調査・分布調査、同7年度の15号墳発掘調査の際に、新たに確認された古墳が追加され、現在では43号まで番号が付けられている。これらは、前方後方墳1基、方墳数基と円墳で構成され、築造時期は前期～中期とみられている。発掘調査が行われたもの、未調査のまま墳丘を失ったものなどが含まれているが、現在では墳丘ないし墳丘状の高まりが観察できるものは23基といわれている。発掘調査が行われた古墳は、9・11～13・15・18・23・27・30・36号墳の10基で、このうち9・18号墳については当時の記録等の所在が不明である。11～13・23・27・30・36号墳の調査概要については、15号墳の調査報告が掲載されている『正直B遺跡－発掘調査報告書－』の第1章第2節で詳しく述べられているので、以下に図を含めてその部分を抜粋・転載する。また、15号墳の調査概要については新たに付け加える。

正直11・12・13号墳（第3図）は、昭和51年に個人の宅地造成に伴って郡山市教育委員会が調査した。11・12・13号墳は正直古墳群の中でも多数の古墳が密集する南ブロック西端の開析谷面に位置している。3基の中では最も西に位置する11号墳は、周溝幅を含めない内寸規模が9.5mの円墳で、箱式石棺の残欠が旧表土の上面から検出された。主体部から遺物は出土していないが、周溝内から南小泉式中～後半段階の土師器坏・埴が得られている。中央に位置するのが12号墳で、内寸の規模・形状は11号墳と同様であるが、古墳の遺存状態が悪かったため、主体部は検出されていない。周溝内から南小泉式中～後半段階の土師器坏・高坏・甕が出土している。東に位置する13号墳は、内寸規模が20m・墳丘高2m余りの円墳で、想定長300cm、幅110cmの割竹形木炭櫛(?)が検出されている。遺物は、主体部から鉄鏃、白玉が、周溝からは双孔の石製模造品が南小泉式中～後半段階の土師器坏・埴・鉢などとともに出土している。また、墳丘内から、勾玉形の石製模造品が出土している。なお、これらの古墳と東に位置する15号墳には空間があり、墳丘の消失した古墳跡が存在する可能性がある。この空間については、昭和51年に調査は行われていないが、同地区の一部は県道の拡幅予定地に含まれていることから、近い将来に古墳跡の有無を確認できるものと考えている。

正直23号墳は、昭和24年に福島県学生考古学会の梅宮茂氏らによって主体部のみの調査が行われている。主体部は木炭櫛と粘土櫛(?)で、木炭櫛から櫛・琥珀玉・刀子形の石製模造品が出土している。23号墳はその後、昭和60年に財団法人東洋文化財研究所によって墳丘の測量調査が行われ、現存する規模が東西26m・南北23m・高さ2.5mで、墳形は円墳である可能性が指摘されている。23号墳は、他の多くの古墳とは開析谷によって画された狭い丘陵上に位置し、同じ丘陵に隣接する22号墳や北側の方墳と思われる28・29号墳とブロックを形成している。また、23号墳の南には正直館跡が丘陵中央部の広いスペースを占有しており、この館によって数～10基前後の古墳が消滅したものと考えている。

正直27号墳は、開畑時に朱塗りの箱式石棺が発見されたため、昭和45年に郡山市教育委員会が調査を行った。27号墳は、正直古墳群のほぼ中央にあり、24～26号墳とともに1グループを形成している。同

第1章 位置と環境

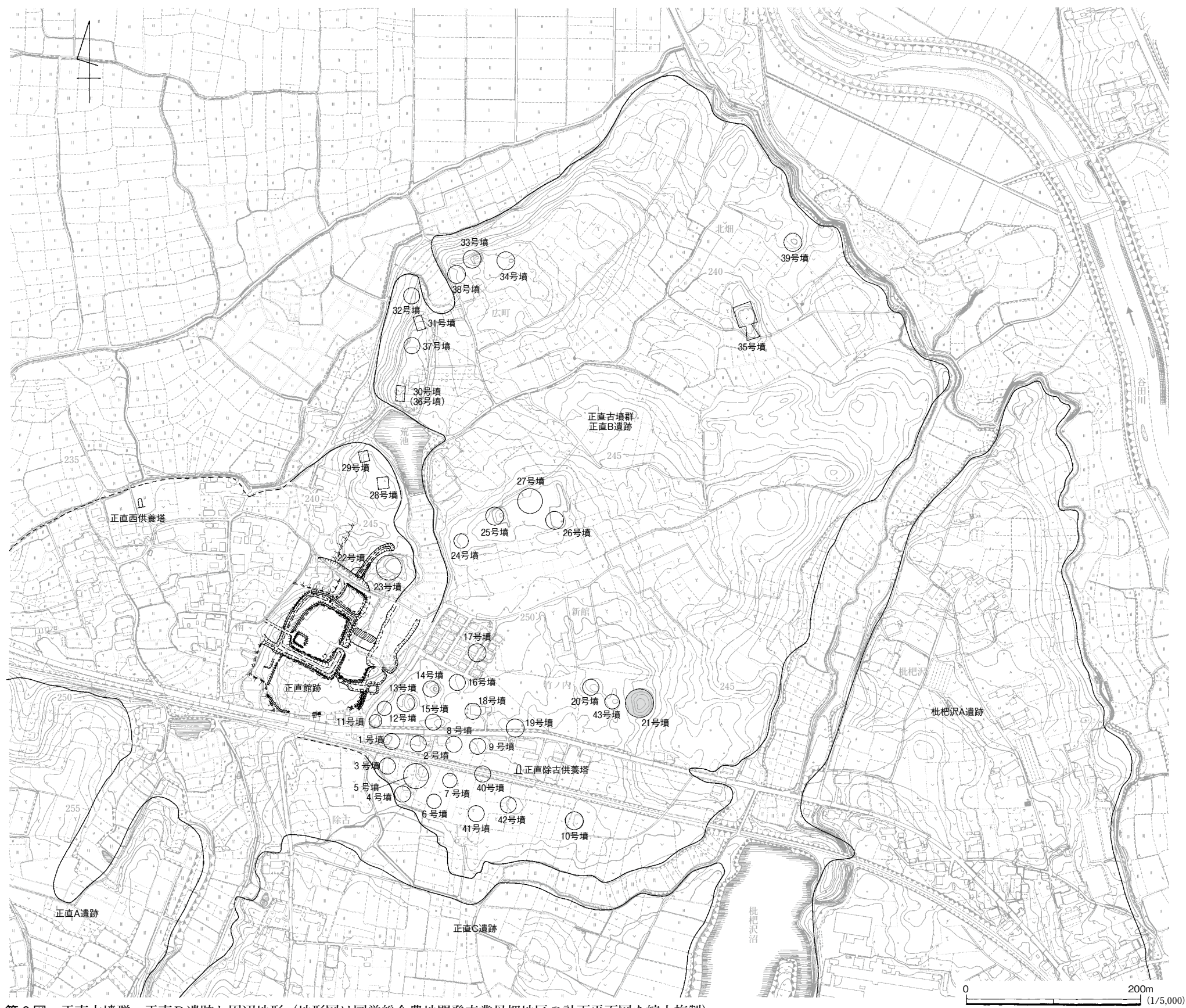
墳は、墳丘規模が径25～26mの円墳と考えられ、主体部は南北に2棺検出された。ともに箱式石棺で、2室構造の北棺からは人骨3体分と鹿角装の剣・同刀子・直刀・鉄斧・ガラス玉・白玉・石製模造品（剣・双孔円板・単孔円板）が、南棺からは鉄鏃・鉄斧・石製模造品（斧・剣・刀子・双孔円板・単孔円板）などの副葬品が豊富に出土している。27号墳は、これらの副葬品から5世紀の中葉期に築造されたものと思われるが、周溝の調査を行っていないため土器が出土しておらず、時期の確定が難しい。

正直30号墳（第4図）は、正直古墳群の北西地区にあり、31・32・37号墳が同一丘陵上にある。また、開析谷を挟んだ北側の台地先端には33・34・38号墳が別グループを形成している。この古墳は、個人の宅地造成に伴い郡山市教育委員会が昭和57年度に調査を行い、南北22.5m、高さ1.5mの長方墳であることを確認している。墳頂部から2棺並列の直葬墓が検出され、中央に位置する2号主体部が先行するものと思われる。この主体部からは刀子・瑪瑙製勾玉・管玉・ガラス玉が、北にある1号主体部からは管玉・琥珀玉・白玉と石製模造品（剣・刀子・双孔円板・単孔円板）が出土し、各主体部の副葬品の違いが指摘されている。

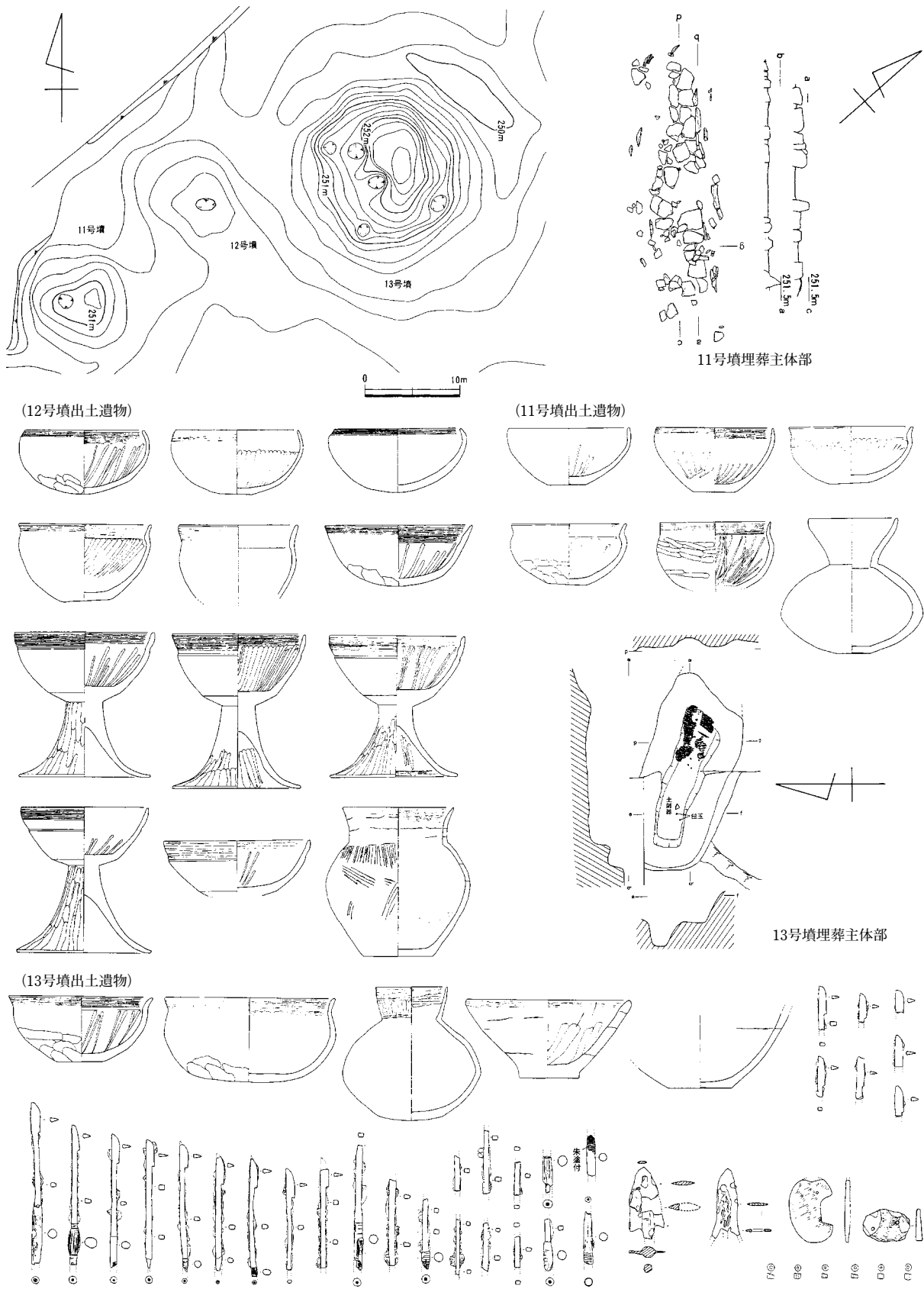
正直36号墳（第5図上段）は、30号墳の周溝内で確認された排水施設のある礫塚で、30号墳の周溝内主体部である可能性が高い。礫塚の規模は長さ440cm以上・幅240～250cmで、副葬品として石製模造品（剣・双孔円板・単孔円板）が出土している。時期は、埋土中から出土した土師器坏から5世紀後半と考えられ、先行すると思われる30号墳もほぼ同時期であると考えている。30号墳の調査では、36号墳以外に墳丘下から弥生後期の竪穴住居跡3棟と墳丘裾から奈良時代の合口甕棺1基（第5図下段）も確認されている。

正直35号墳（第6図）は、当初中期の前方後円墳と考えられていたが、穴沢味光氏の前方後方墳ではないかとの指摘を受けた柳沼賢治氏などによる測量調査で前方後方墳であることが確認されている。調査は平成3年に実施され、これによって後方部がやや縦長（22×25m）で、全長は37mであることが判明した。また、測量報告の中で明言は避けながらも35号墳が4世紀代の古墳であることを指摘している。また、既調査の古墳が5世紀後半に偏っていることから、今後は35号墳に後続する中期前半の古墳が存在するか否かを確認し、正直古墳群形成の契機をさぐる必要があるとの提言がなされた。この後、35号墳の築造時期については、谷田川を挟んだ対岸から発見された前方後方墳の大安場古墳との比較で、4世紀でもやや古い時期との考えも提示されている。

正直15号墳（第7・8図）は、11～13号墳と同じく古墳が集中する南ブロックに位置する。県道拡幅工事に伴い、複合する正直B遺跡とともに平成7年度に発掘調査が行われた。周溝内寸径が約20mの円墳で、墳端と周溝の間にテラスが存在した可能もあったことから、テラスがある場合とない場合の2種類の図面が作成されている。テラスが存在した場合は、墳丘規模は約14mとなる。主体部は確認されていないが、墳頂部や周溝上層から凝灰岩片が出土したことから、箱式石棺であったと考えられている。周溝内・墳丘下の旧表土直上面・墳丘盛土から、土師器坏・高坏・埴・甕・須恵器甕・石製模造品（双孔円板）と弥生土器などが出土しており、土師器坏や埴の特徴から築造時期は中期後半と考えられている。なお、周辺の正直B遺跡にあたる部分の調査では、東側で土坑墓3基、北側で弥生時代後期の竪穴住居跡2棟などが確認されている。土坑墓は、土器が出土していないため時期は明らかでないが、隣接古墳との位置関係や堆積土中の火山灰（F P）の有無などから、中期後半から後期前半と考えられている。

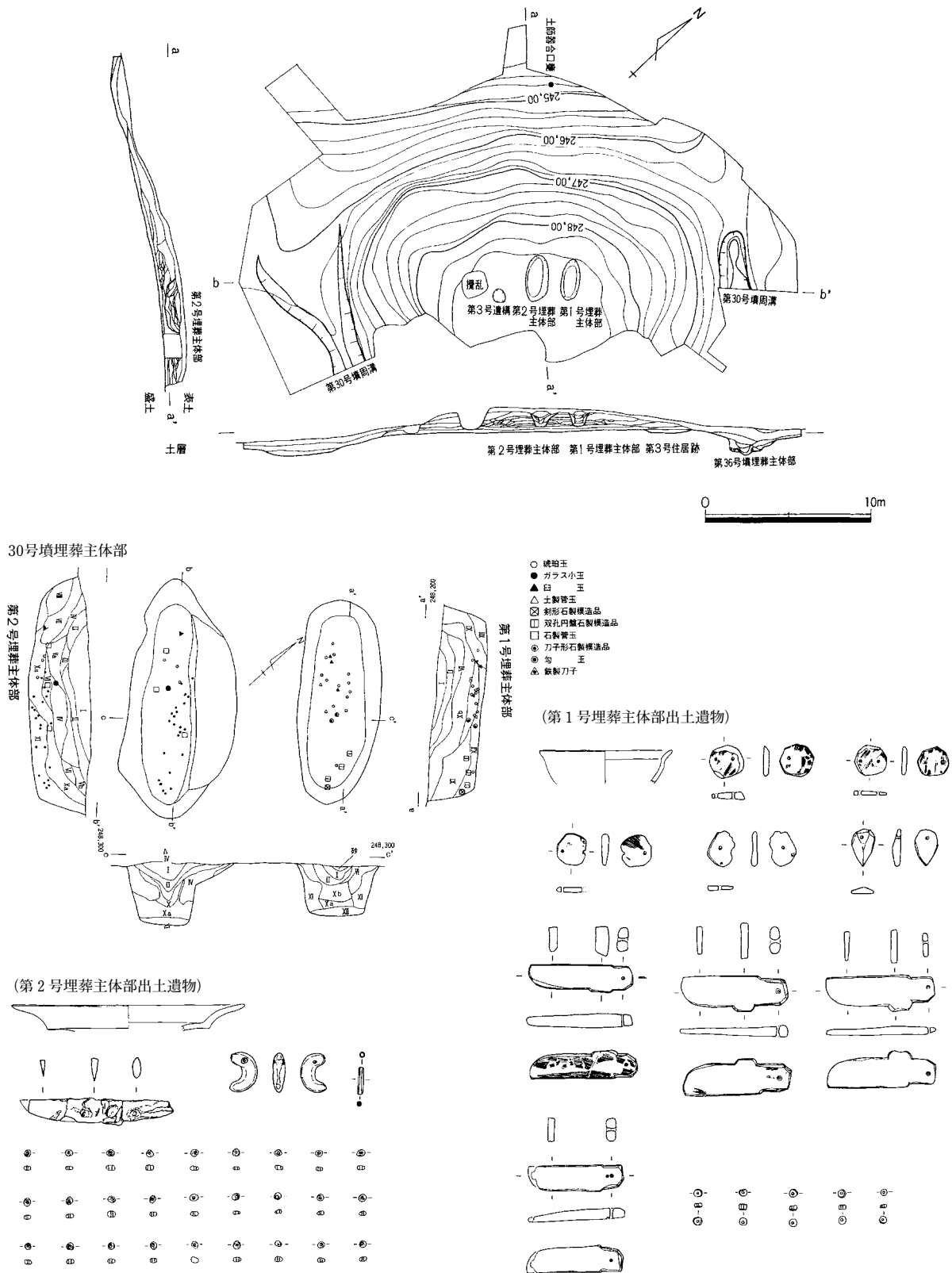


第2図 正直古墳群・正直B遺跡と周辺地形 (地形図は国営総合農地開発事業母畑地区の計画平面図を縮小複製)

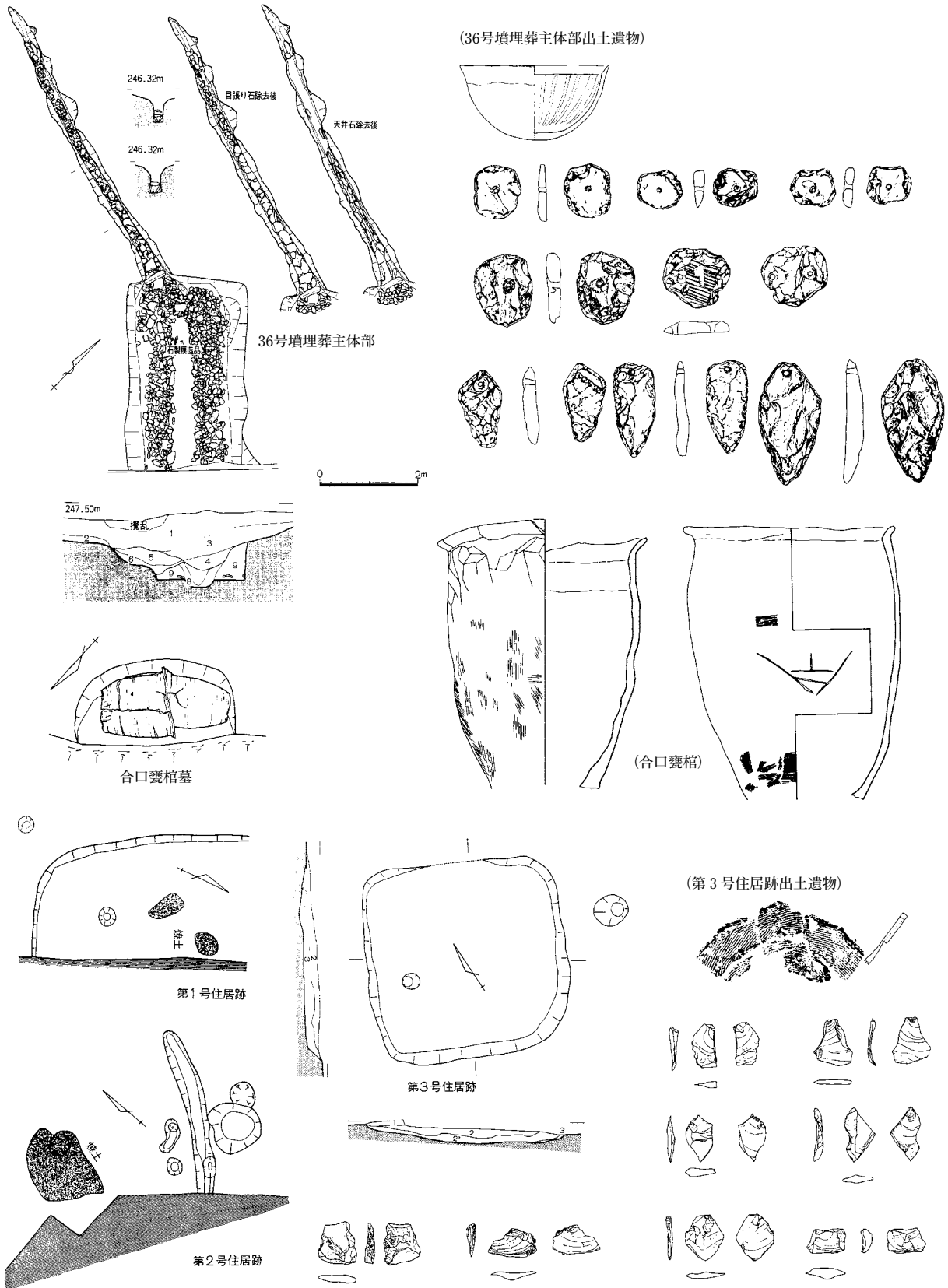


第3圖 正直11・12・13号墳

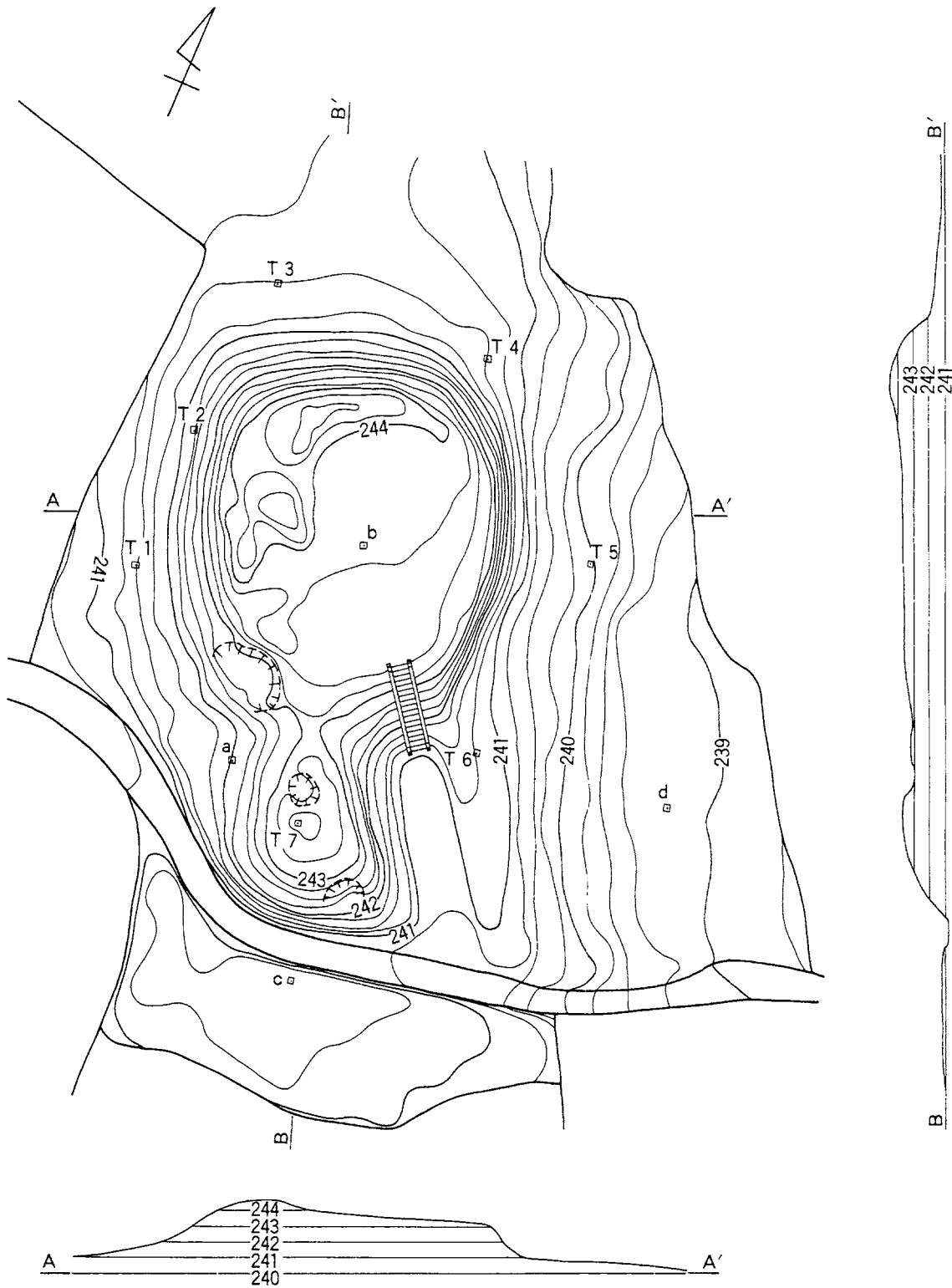
第1章 位置と環境



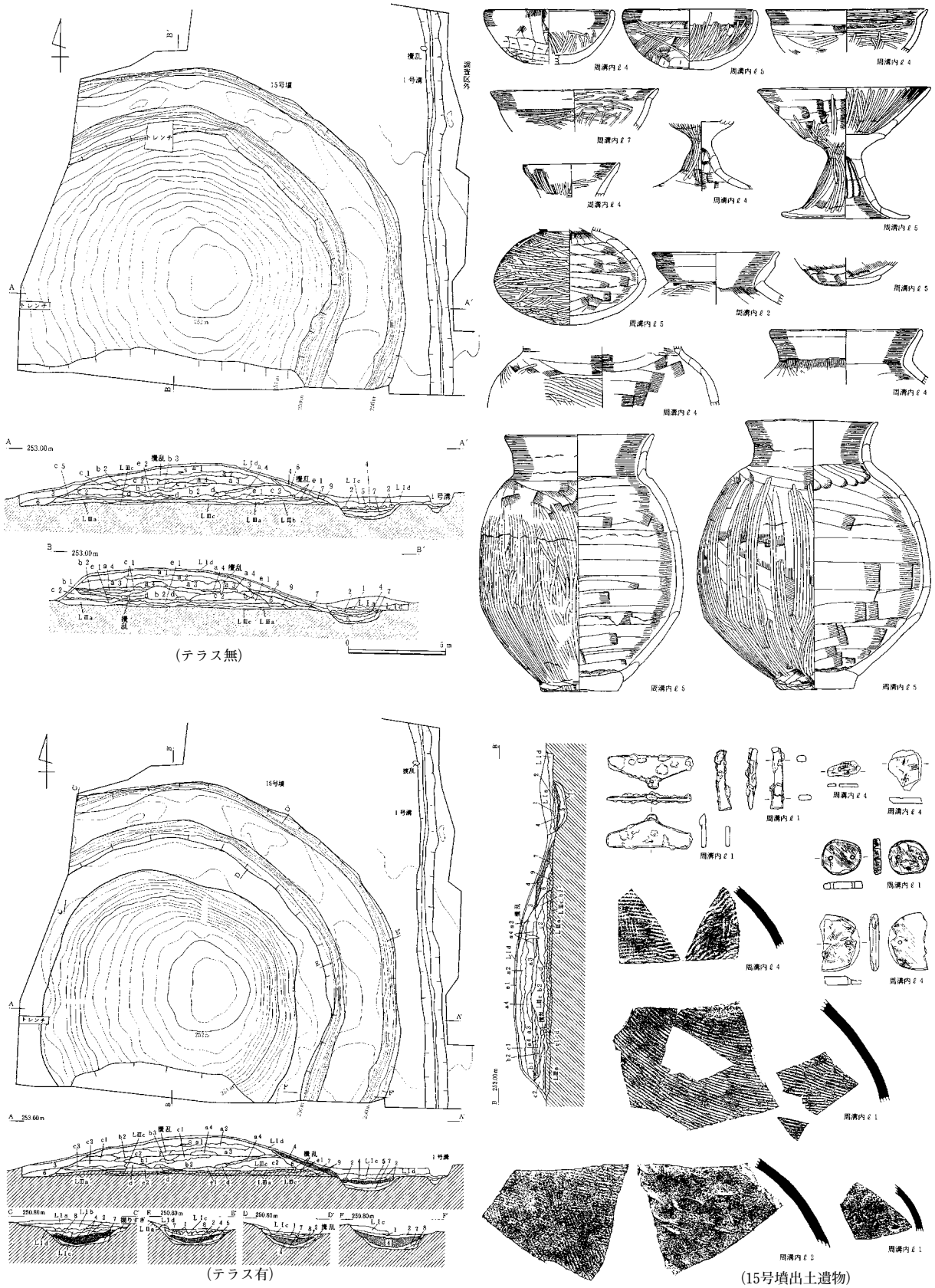
第4図 正直30・36号墳 (1)



第5図 正直30・36号墳 (2)

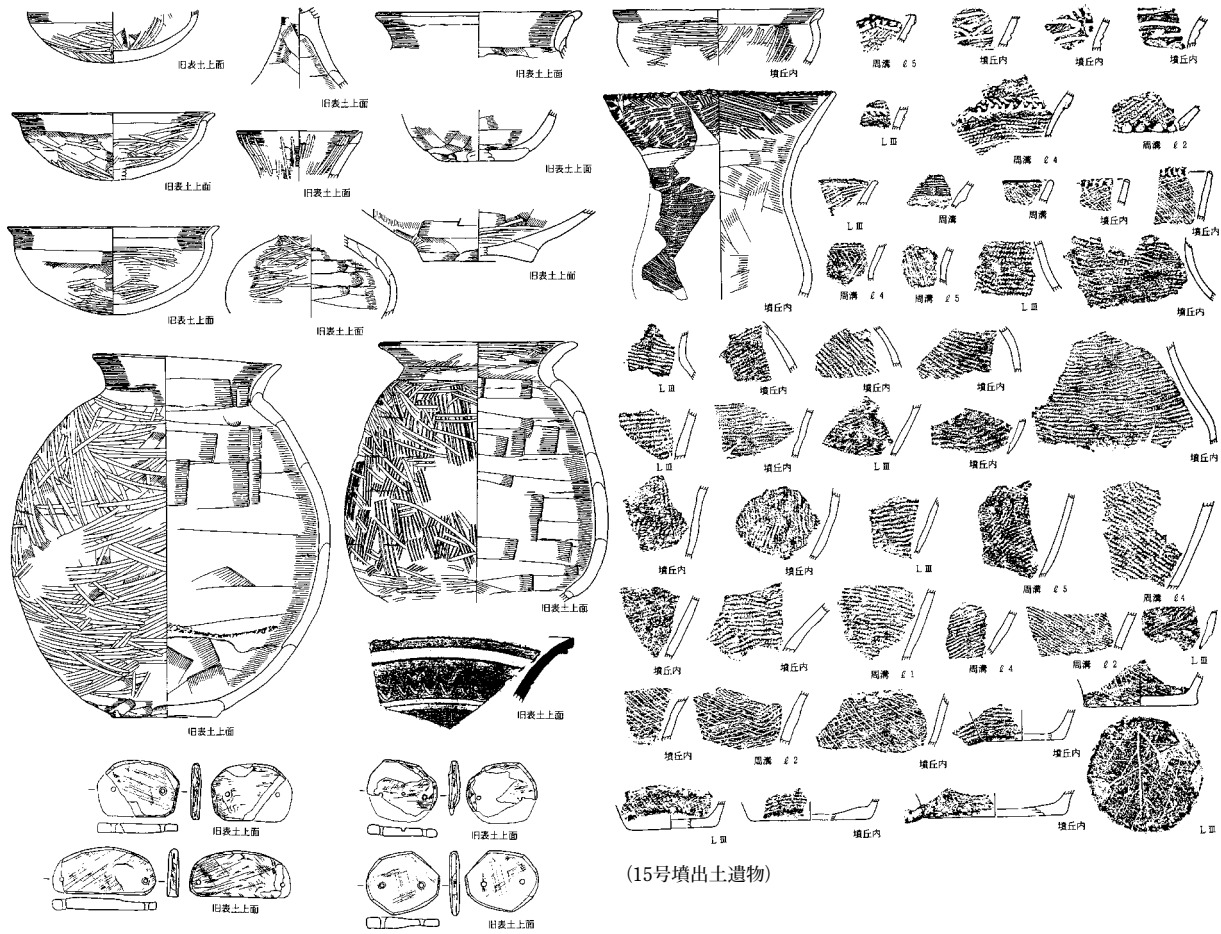


第6図 正直35号墳

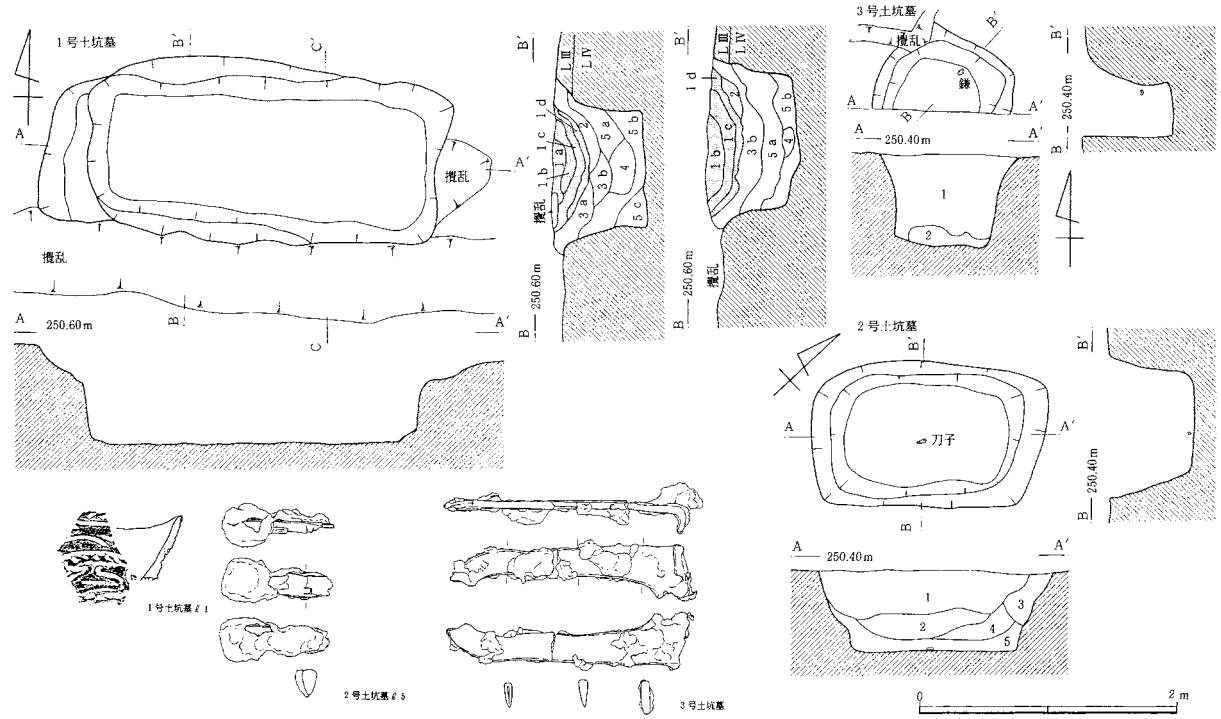


第7図 正直15号墳 (1)

第1章 位置と環境



(15号墳出土遺物)



第8図 正直15号墳 (2)

< 註 >

- 1 鈴木雄三 1987 『東丸山遺跡』郡山カルチャーパーク関連報告第1集 福島県郡山市都市計画部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 2 高松俊雄・柳沼賢治ほか 1982 「大善寺地区遺跡」『郡山東部Ⅱ』福島県郡山市教育委員会
- 3 石山 滋 1999 『山中日照田遺跡—第2次調査報告』エヌ・ティ・ティ東北移動通信網株式会社・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 4 柳田和久・高松俊雄 1986 『北山田遺跡 発掘調査概報』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 5 柳田和久・高松俊雄 1986 『北山田2号墳 発掘調査概報』福島県郡山市教育委員会
- 6 柳田和久・高松俊雄 1988 「北山田遺跡・北山田3号墳」『郡山東部8』福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 7 高松俊雄 1989 「北山田遺跡」『郡山東部9』福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 8 柳沼賢治 1985 「宮田A遺跡」『郡山東部Ⅴ』福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 9 木元元治ほか 1981 「徳定遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』福島県教育委員会・日本国有鉄道
- 10 柳沼賢治 2014 『徳定A・B遺跡—第1・2次発掘調査報告—』福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 11 柳沼賢治 2015 『徳定A・B遺跡—第3・4次発掘調査報告—』福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 12 柳沼賢治 2016 『徳定A・B遺跡—第5・6次発掘調査報告—』福島県郡山市都市整備部・福島県郡山市教育委員会・公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 13 高松俊雄 1996 『上之内遺跡』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 14 高松俊雄ほか 1999 『清水内遺跡—6・8・9区調査報告—第1冊』郡山市御前南土地区画整理組合・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 15 柳沼賢治 1987 『大根畑遺跡—発掘調査報告書—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 16 穴澤武泰 1991 『大根畑遺跡—第4次発掘調査報告書—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 17 柳沼賢治 1987 「永作遺跡」『郡山東部7』福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 18 柳沼賢治 1990 「南山田遺跡」『郡山東部10』福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 19 柳沼賢治 1991 『南山田遺跡 第一冊』農林水産省東北農政局・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 20 郡山市 1975 「資料(上)」『郡山市史』第8巻
- 21 山内幹夫ほか 1994 「正直A遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告34』福島県教育委員会
- 22 田中正能 1974 『太田遺跡』郡山市教育委員会
- 23 鈴木雄三 1988 『丸山遺跡』郡山カルチャーパーク関連報告第2集 福島県郡山市都市計画部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 24 高松俊雄ほか 1984 『三ツ垣古墳群・史跡宇津峯』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 25 柳沼賢治 1997 『大安場古墳群—第1次発掘調査報告—』福島県郡山市教育委員会
- 26 柳沼賢治 1999 『大安場古墳群—第3次発掘調査報告—』福島県郡山市教育委員会
- 27 註2文献の第9章総括終わりに、註20文献の第1編考古個別解説22、註25文献の第1章第2節歴史的環境などを参照した。
- 28 金崎佳生・高松俊雄ほか 1979 『阿弥陀壇 古墳群発掘調査概報』福島県郡山市教育委員会
- 29～32 註4～7文献と同じ
- 33・34 註18・19文献と同じ

第1章 位置と環境

- 35 註25文献の第1章第1節歴史的環境に記載された内容を参照した。
- 36 高松俊雄 1986 「妻見塚遺跡」『郡山東部6』福島県郡山市教育委員会・農林水産省東北農政局
- 37 柳沼賢治 1986 『下永田B遺跡—発掘調査報告書—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 38 佐藤雄寿 1960 「田村郡御代田古墳調査」『福島県埋蔵文化財調査報告書』福島県教育委員会
- 39 註25文献の第1章第1節歴史的環境に記載された内容を参照した。
- 40 伊東信雄 1971 『郡山市福楽沢遺跡発掘調査報告書』福島県郡山市教育委員会
- 41 田中正能ほか 1962 「福島県郡山麦塚古墳」福島県郡山市教育委員会
- 42 田中正能ほか 1971 『福島県郡山市淵の上遺跡発掘調査概報—阿武隈川上流改修工事文化財調査—』東北地方建設局福島工事事務所 福島県郡山市教育委員会
- 43 押山雄三 2011 「守山城跡で発見された古墳」大安場史跡公園平成23年度第1回歴史講座発表資料
- 44 垣内和孝 1994 「松井綾夫著『安積郡大槻村に於ける遺跡遺物の研究』の紹介と若干の検討—特に「大槻村古墳墳丘分布図」を中心に—」『研究紀要』第1号 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
この文献の中で執筆者は、「大槻村古墳墳丘分布図」にある古墳の位置を現在の地図に落とし込んだ「大槻町古墳分布推定図」を作成しているが、その中で、古墳の分布に数か所のまとまりがあると捉え、北ノ山壇（字新池下・御花畑）に集中する73基余りの古墳を大槻古墳群と呼称することを提唱している。
- 45 郡山市教育委員会 2001 『郡山市の文化財 保存版』
- 46 柳沼賢治 1992 『蒲倉古墳群—分布調査・試掘調査報告—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 47 垣内和孝ほか 1998 『蒲倉古墳群—測量調査・補足調査報告—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 48 高松俊雄ほか 1998 『蒲倉古墳群—55・56・57号墳調査報告—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 49 嶋原靖彦・垣内和孝ほか 1999 『蒲倉古墳群—第5調査報告—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 50 垣内和孝・菅野直美 2000 『蒲倉古墳群—第6次調査報告—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 51 垣内和孝・菅野直美 2001 『蒲倉古墳群—第7次調査報告—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 52 柳沼賢治 2009 『蒲倉古墳群—第8・9次発掘調査報告—』福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市文化・学び振興公社
- 53 註25文献の第1章第2節歴史的環境や註47文献の第1章位置と環境に記載された内容を参照した。
- 54 高松俊雄・佐久間正明 2002 「蝦夷穴横穴墓群—12・13号横穴調査報告—」郡山市農林部・福島県郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 55 福島県 1964 「資料編一 考古資料」『福島県史』第6巻
- 56 註20と同じ
- 57 佐藤満夫・高松俊雄 1977 『正直11・12・13号墳—発掘調査概要—』福島県郡山市教育委員会
- 58 吉田幸一・高松俊雄ほか 1982 『正直古墳群第30・36号墳—発掘調査概要—』福島県郡山市教育委員会
- 59 柳沼賢治・押山雄三・仲田茂司 1991 「郡山市正直35号墳の測量調査」『福島考古』第32号 福島県考古学会
- 60 押山雄三 1996 『正直B遺跡—発掘調査報告書—』福島県県中建設事務所・郡山市教育委員会・財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至るまで

正直B遺跡内に所在する正直古墳群の保護・保存を目的に、文化庁の国庫補助事業として、平成29年度から古墳群の内容把握と実態解明のため発掘調査を進めている。

平成29年度は、墳丘から周溝にかけて一部削平を受けた正直21号墳と、20号墳、43号墳を調査対象とした約2,800㎡の刈り払いをした後に、地形測量及び古墳測量図を作成した。古墳群の中で中核的な位置付けとなる正直21号墳については、削平部分の精査を行い、古墳の形態・規模、周溝の確認を行った。ただし、周溝を含めた詳細な規模や埋葬施設が未確認であること、古墳の年代確定に至る遺物が検出されなかったことから、平成30年度に調査を継続することとなった。

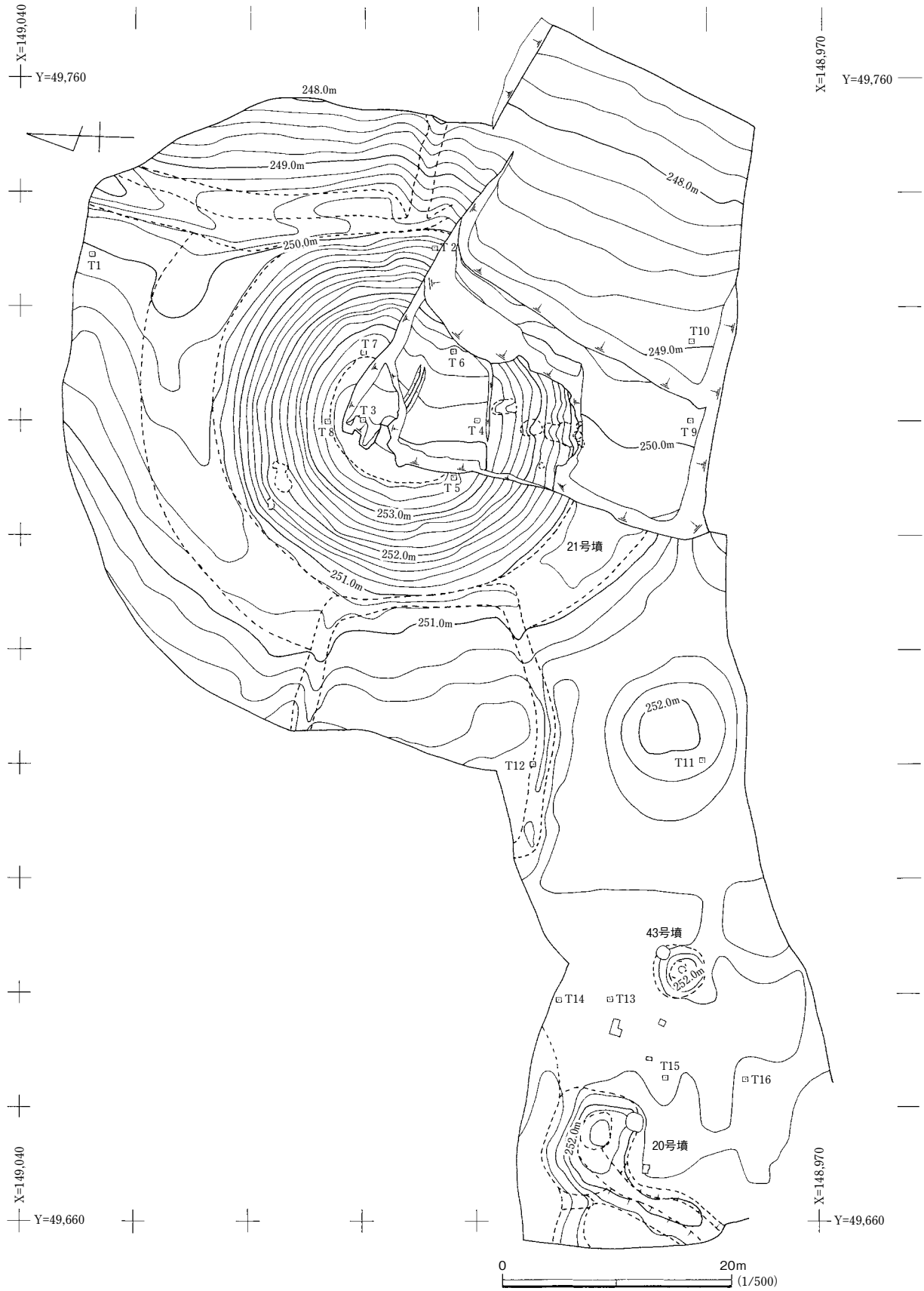
平成30年度は、正直21号墳の周溝を含めた詳細な規模の確定、主体部の確認、築造年代の確定などを調査目的に、平成30年4月20日付けで地権者から発掘調査の承諾を得て、4月23日付けで郡山市と公益財団法人郡山市文化・学び振興公社との間で、正直B遺跡「正直古墳群」第2次発掘調査及び報告書原稿作成業務の委託契約を締結した。また、5月16日に正直行政区住民の方々に回覧を通して発掘調査の周知を図り、5月17日付けで発掘調査の実施について福島県に99条の届出を行った。

古墳の発掘調査にあたり、正直B遺跡「正直古墳群」調査保存に係る懇談会（以下、懇談会）の柳沼賢治委員より、6月14日、7月11日、7月31日の3回にわたって現地調査の指導を受け、墳頂部から2棺並列となる埋葬施設を確認するとともに、周溝に設定したトレンチ調査からは古墳の築造方法に関する情報等を得ることができた。また、周溝等から壺形埴輪片が出土し、近年の遺物の出土事例をもとに古墳の築造時期について懇談会で協議を行い、古墳時代前期末から中期初頭に相当する時期のものとの評価が成された。

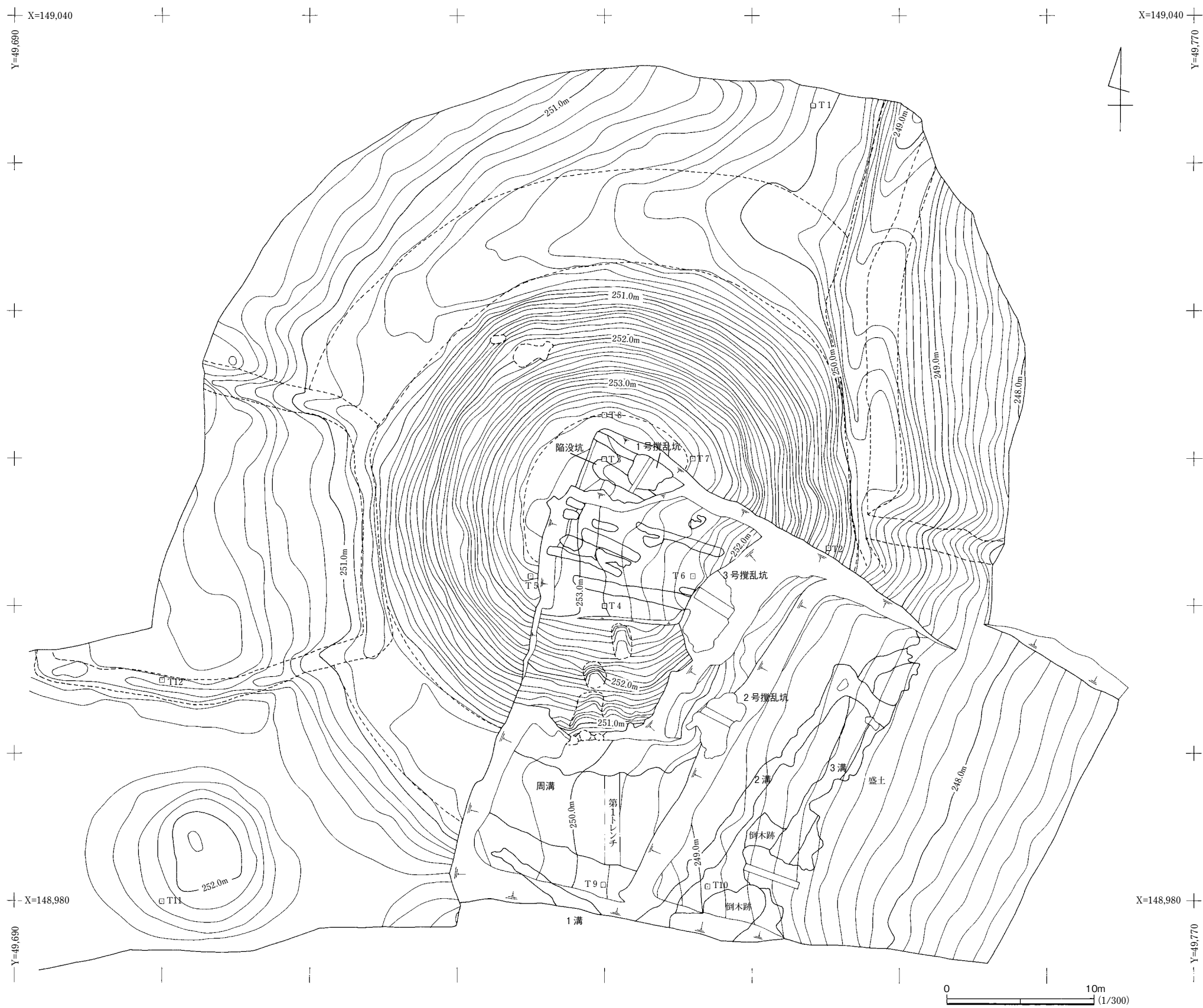
正直古墳群は、これまで古墳時代前期後半の前方後方墳と推定されている正直35号墳と、古墳時代中期に属する円墳・方墳から構成されるとの見方であったが、正直21号墳の発掘調査の結果、古墳群の年代的な空白を埋める重要な位置付けにある古墳であることが分かり、9月15日には、調査成果の一端を正直行政区住民及び報道機関等を対象に現地説明会を開催し、正直21号墳の重要性について周知する機会を設けた。現地説明会後に一部補足調査を行い、古墳の仮養生を実施して現地調査を終了した。10月より屋内作業に入り、記録整理と報告書作成にあたった。11月には、レーザー測量により正直35号墳の測量図を作成し、平成31年度の発掘調査に向けた準備を進めた。

平成30年度の懇談会は、8月（第1回）、11月（第2回）、2月（第3回文書開催）に実施し、調査方法の検討と課題に対する検証、古墳の評価等について指導助言を受けた。8月28日には文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門の森先一貴技官より調査方法等について現地指導を頂戴した。

第2章 調査の経緯



第9図 正直20・21・43号墳周辺測量図



第10図 第1次発掘調査終了後の正直21号墳

第2節 第1次発掘調査の目的と成果

第1次発掘調査は、墳丘や周溝の一部が削平されて、保護・保存が急務となった正直21号墳と同古墳に隣接する20・43号墳が対象となった。この調査は、3基の位置関係を把握し、墳形及び大きさを確定することが主な目的であった。このため、3基が所在する約2,800㎡の範囲の地形測量及び各々の10cmコンターによる現況測量を行った。また、21号墳については、より詳細な情報を得るため、削平部分の精査を行い、範囲やその深さを把握するとともに、この部分を利用して埋葬施設・周溝の確認、墳丘盛土の観察なども実施した。その結果、次のような成果を得た。

正直21号墳 古墳群の南東部、東に延びる台地先端に築造された古墳で、3基の中では最も東に位置する。墳丘南東から南にかけて、1/4程度が大小の削平を受けている。墳丘南側斜面は、盛土が露出した程度であるが、墳丘南東側の中腹から下と南側の墳裾は失われている。墳頂周辺は、東側の中腹から南側の中腹辺りまでの範囲が10～50cm程度削平され、平坦面と想定される部分は北側と西側にのみ僅かに遺存する。墳丘の等高線は墳裾を南北に旧道が走る東側がやや直線的であるが、他はほぼ等間隔に円弧状にまわることから、墳形は段築のない円墳とみられる。現況の墳丘規模は、北東－南西の墳端想定線で34m前後、墳高は西側からみると2.7m前後、東側からは3.4m前後である。削平により露出した墳丘東側断面の盛土は、旧表土の上に黄褐色系の土と黒褐色系の土を交互に積み重ね、最も外側には黄褐色系の土を積んでいる。周溝は、墳丘南側の削平部で約4.5～6.5mの幅で残存しており、めぐっていることは確実と思われるが、西側の墳裾でコの字状に折れる溝状の落ち込みに挟まれた南北約15mの範囲や東側墳裾を走る旧道とその東側の斜面では、等高線に窪地状の地形が読み取れないことから、途切れる可能性もある。埋葬施設は一部を掘り下げてしまったが、墳頂の削平部分で木棺の陥没坑とみられる落ち込みを検出した。掘方は確認できていないが、この落ち込みは墳頂の北寄りに位置していることから、別の埋葬施設が南側に存在する可能性もある。削平部分の精査で土師器片などが331点出土したが、これらにより築造時期を特定するまでには至らなかった。

正直20号墳 古墳群の中で、多数の古墳が密集する南ブロックと21号墳の間に築造された古墳で、21号墳から40m前後西に離れている。墳丘南西端に北東－南西方向に延びる時期不明の土手状の高まりが取り付いているが、墳丘北側から東側を経て南側に至る等高線は直線的にまわり込むことから、墳形は方墳の可能性が高い。現況の墳丘規模は東西約10.9m×南北約7.9mで、東西方向にやや長い形状である。墳頂は東に寄り、東西約3.3m×南北約2.1mの範囲で平坦な面が確認できるが、墳高が最大で1.1m前後であることから、上面は削られた可能性がある。墳裾の等高線からは、周溝の有無は確認できない。

正直43号墳 21号墳からは西に約30m、20号墳からは東に約10m離れた台地平坦面に位置する。墳丘の等高線は円弧状にまわることから、墳形は円墳とみられる。墳丘規模は長径約4.6m×短径約4.5mで、墳高は0.6m前後である。墳裾の外周はほぼ平坦で、周溝の有無は確認できない。古墳群の中では極めて小さいことから、詳細については検討する余地がある。

その他 21号墳の南側削平部分で1号溝跡、東側の削平部分で2・3号溝跡、その北側断面で4号溝跡を検出した。旧道下の4号溝跡は21号墳を切っているが、他の3条と21号墳との関係は不明である。

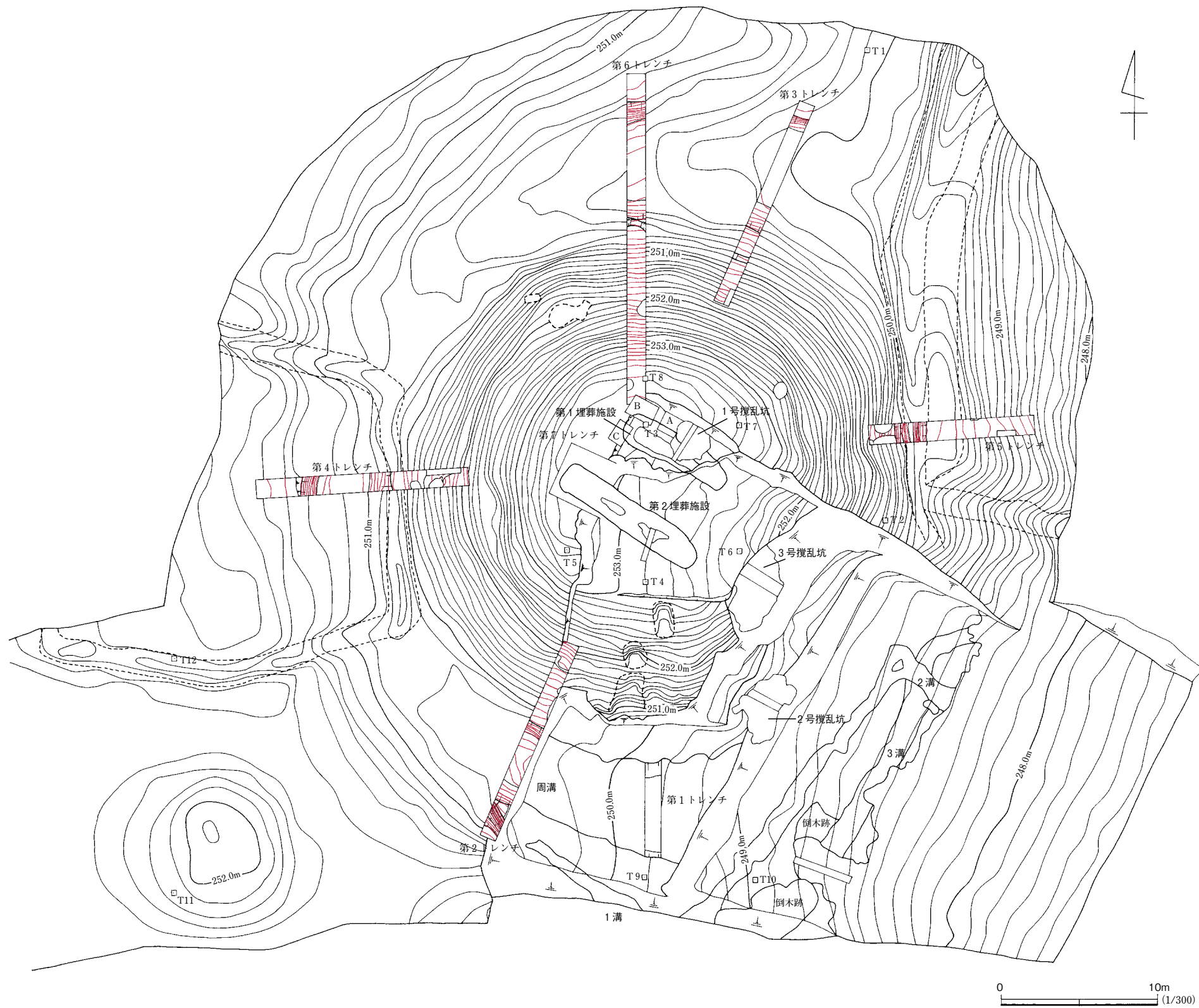
第3節 第2次発掘調査の経過

今年度は、正直21号墳の発掘調査を継続した。同古墳については、第1次発掘調査終了時点で、①周溝を含めた詳細な規模の確定、②等高線の観察で不明瞭な墳丘西側と東側の周溝の確認、③墳頂の北寄りに位置する木棺陥没坑を伴う埋葬施設の掘方確認、④③以外の埋葬施設の確認、⑤築造時期の確定、などが課題として残っており、今回はこれらを解決することが主な目的となった。

発掘調査は、先ず第1次発掘調査の際に、土のう袋で分別採取した木棺陥没坑を切る1号攪乱坑の堆積土及び第1トレンチ周溝堆積土を洗浄し、副葬品などの遺物の有無を確認する作業からはじめた。その後、①・②のため5本のトレンチを設定し、周溝の検出とその掘り下げを行った。第3・4・6トレンチでは、墳丘側の掘り下げ範囲が旧表土層を確認できるレベルまで達していなかったことから、懇談会からの指導を受けて、同層が検出できる位置まで延長して掘り下げた。また、延長後の第6トレンチでは、旧表土層から上の傾斜がやや緩くなっており、玉川一郎委員から段築の可能性が指摘されたため、墳頂部までさらに延長してその有無を確認した。③・④については、柳沼賢治委員の現場指導日に合わせて、その都度断続的に実施した。1号攪乱坑西壁面下部で掘方の立ち上がりを確認したことを契機として、北寄りの埋葬施設掘方を面的に検出し、その後、南側で新たな埋葬施設掘方も発見した。

各トレンチの掘り下げは、芝ジョレンと移植ゴテを併用して行った。出土遺物については、周溝内のものは極力出土位置を記録して取り上げた。測量にあたっては、第1次発掘調査で打設した測量基準点T3 (X=149010.000, Y=49730.000)、T5 (X=149002.000, Y=49725.000)、T8 (X:149013.000, Y=49730.000) を主に使用した。遺構の平面図と断面図はともに縮尺20分の1とし、平面図には10cm間隔で等高線を記入した。以下に調査日誌の概要を記す。

- 5月30日(水) 第1次発掘調査範囲を養生するために使ったシート類・土のう袋の片付け作業を行う。
- 6月1日(金) 片付け作業終了。第1次発掘調査範囲の清掃と墳丘・周溝部分の草刈り作業を行う。
- 6月5日(火) テントを設営し、1号攪乱坑堆積土及び第1トレンチ周溝堆積土の洗浄作業を開始する。
- 6月8日(金) 1号攪乱坑堆積土洗浄作業終了。土師器細片が13点みつかる。副葬品の紛れ込みなし。
- 6月14日(木) 柳沼賢治委員埋葬施設調査指導。陥没坑を切る1号攪乱坑東壁面を精査し、埋葬施設掘方の立ち上がりらしい土質の違いがみつかると、微妙な違いのため面的に追えず。
- 6月15日(金) 第1トレンチ周溝堆積土洗浄作業終了。土師器細片が35点みつかる。
- 6月18日(月) 第3トレンチの掘り下げを開始する。表土下に周溝を検出し、掘り下げを継続する。
- 6月26日(火) 第3トレンチの掘り下げを終了する。墳裾から墳端は黄褐色の地山層が連続しており、墳丘下部はかなりの高さまで地山削り出しで築造されていることが判明する。
- 6月28日(木) 第2トレンチの掘り下げを開始する。表土下に周溝を検出し、掘り下げを継続する。
- 7月2日(月) 第4トレンチの掘り下げを開始する。等高線では周溝が不明瞭な場所であるため、慎重に掘り下げる。第2トレンチでは、周溝外端と接する東西方向の溝跡を検出する。
- 7月4日(水) 第4トレンチで周溝を検出し、掘り下げを継続する。断面観察により、墳裾を南北に延びる溝状の落ち込みは表土から掘り込まれ、墳丘を削っていることが判明する。



第11図 正直21号墳トレンチの配置と遺構

第3節 第2次発掘調査の経過

- 7月10日(火) 第2トレンチの周溝掘り下げを終了する。溝跡を掘り下げ、トレンチ内では周溝と重複していないことを確認する。墳丘側では、かなり高い位置で旧表土層を検出する。
- 7月11日(水) 柳沼賢治委員埋葬施設調査指導。陥没坑を切る1号攪乱坑西側壁面下部で、埋葬施設掘方北側の立ち上がりを検出する。現墳丘面では盛土との違いが不明瞭なため、壁面から西側に複数の小トレンチを設定して掘り下げ、北側の続きと西側を面的に検出する。
- 7月12日(木) 第4トレンチの掘り下げを終了する。周溝がきれいにまわることを確認する。
- 7月17日(火) 第5トレンチの調査を開始する。ここも、周溝が不明瞭な場所であるため、慎重に掘り下げる。墳頂削平部では、陥没坑を伴う埋葬施設掘方の東と南の範囲を検出する。
- 7月19日(木) 第5トレンチの西端付近で、墳丘面を削る攪乱坑と南北方向の溝跡を検出する。溝跡は旧道下に位置しており、第1次発掘調査で断面のみを確認した4号溝跡と判断する。
- 7月23日(月) 第6トレンチの調査を開始する。第5トレンチでは4号溝跡の掘り下げを行う。
- 7月31日(火) 柳沼賢治委員埋葬施設調査指導。先に検出した埋葬施設掘方の南側を精査し、新たな埋葬施設掘方の一部を検出する。これにより埋葬施設は2基並列となる。
- 8月1日(水) 前日確認した埋葬施設掘方の検出作業を継続する。西端は削平部の外側に延びることが確実となり、西に拡張して掘り下げる。拡張部分を第7トレンチとする。
- 8月20日(月) 第5トレンチの掘り下げを終了する。周溝堆積土と思われる黒褐色土は確認できたが、外側の立ち上がりは不明。第7トレンチでは埋葬施設掘方の西端を検出する。
- 8月22日(水) 第1回懇談会開催。委員現地調査。①埋葬施設は、検出された2基でよいのではないかと。②第3・4・6トレンチは、旧表土層が確認できるレベルまで墳丘側を延長すること。③出土した土器に壺形埴輪の底部がある。似た資料は、茨城県岩井市の上出島2号墳や栃木県上三川町浅間神社古墳で出土している。などの指導・助言があった。
- 8月23日(木) 前日の指導を受けて、第3・4・6トレンチの墳丘側の延長作業を開始する。
- 8月28日(火) 文化庁の森先一貴文部科学技官と福島県教育庁の岡部睦美文化財主査が視察する。
- 8月31日(金) 第3・4・6トレンチの墳丘面に旧表土層を確認し、延長作業を終了する。
- 9月3日(月) 各トレンチの写真撮影及び実測作業を開始する。この作業は5日にほぼ終了する。
- 9月4日(火) 墳頂削平部を再精査し、2基の埋葬施設掘方の写真撮影を行う。
- 9月11日(火) ドローンによる空中写真撮影を行う。現地説明会に向けた準備作業を開始する。
- 9月15日(土) 地元の住民を対象とした現地説明会を開催する。見学者70名。来跡した玉川一郎委員から、第6トレンチをさらに延長して段築の有無を確認するようにとの指導を受ける。
- 9月18日(火) 第5トレンチの埋め戻しを行う。並行して、第6トレンチを墳頂部まで延長する。墳頂平坦面の端部付近で、壺形埴輪の底部片や胴部片がややまとまって出土する。
- 9月19日(水) 第6トレンチの延長作業を終了する。段築なし。第2・4トレンチの埋め戻しを行う。
- 9月20日(木) 第3・6トレンチの埋め戻しを行う。引き続き、墳丘東側削平部の養生作業を行う。
- 9月25日(火) 1号攪乱坑の埋め戻しを行う。引き続き、墳頂削平部の養生作業を開始する。
- 9月26日(水) 墳頂削平部養生作業を終了し、引き続き、墳頂南側削平部の養生作業を行う。
- 9月28日(金) 発掘調査器材を撤収し、第2次発掘調査を終了する。

第3章 調査報告

第1節 周溝・墳丘下部

概要

墳丘下部の構築状況や周溝の範囲・掘削状況などを確認し、周溝を含めた詳細な規模を明らかにするため5本のトレンチを設定した。この内、第2・3・6トレンチは、現況測量図で墳裾の形状が整い、これに連続する周溝と思われる窪地状の地形もよく表れている墳丘の南西側・北東側・北側に設定した。また、第4・5トレンチは、ともに現況測量図で墳裾の等高線に乱れがあり、これに続く周溝の痕跡も不明瞭な墳丘の西側と東側に設定した。なお、当初、墳丘面の掘り下げ範囲は各トレンチで任意に設定したが、第3・4・6トレンチでは旧表土層が確認できる範囲まで達していなかったため、懇談会の指導に基づき、同層が確認できる位置まで掘り下げ範囲を延長した。また、延長後の墳丘面に段築状の緩い傾斜が認められた第6トレンチでは、最終的に墳頂部までさらに延長した。

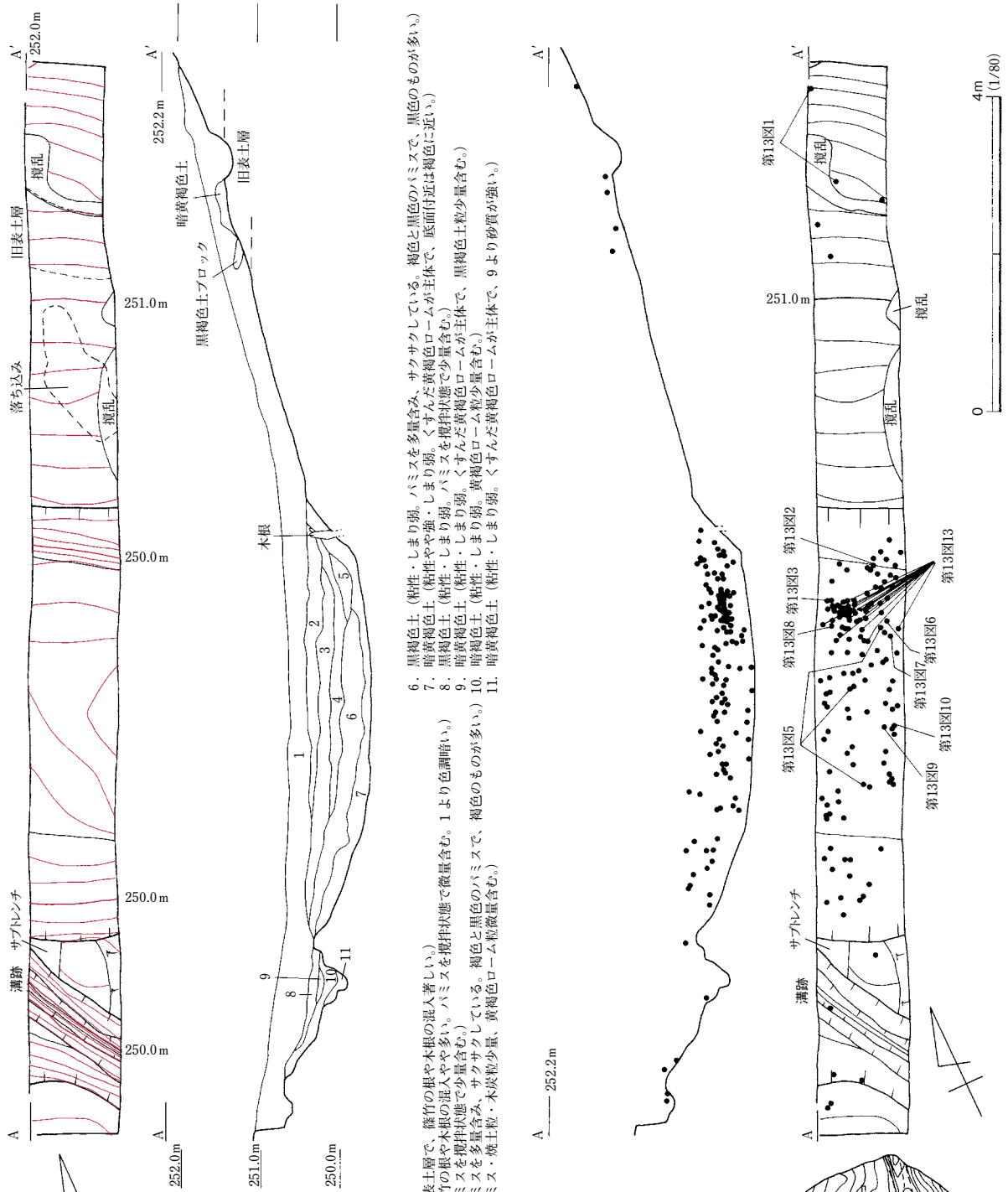
第2トレンチ（第12・13図、図版3・7・8）

墳丘の南西側に設定した幅約1.1m、長さ約13.5mの南北方向トレンチである。調査面積は約14.8㎡である。墳丘南側削平部の西端法面に接するように設定したため、東壁面沿いはすでに周溝と墳丘面が露出しており、これを目安に全体的に表土を掘り下げた。その結果、墳丘面とこれに連続する周溝を確認し、南端付近では周溝の南側で溝跡を検出した。周溝南端から溝跡の検出面は、黄褐色ロームである。

周溝は、地山層の黄褐色ロームと黄褐色砂質ロームを掘り抜き、黄褐色砂礫土まで達している。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線は比較的明瞭であるが、外側のそれはやや不明瞭である。下端から上端への立ち上がりの角度は、墳丘側で約40°、外側で約20°で、墳丘側がかなり急峻である。底面は、南北方向がおおむね平坦で、東西方向では東に向かって緩く傾斜している。底面標高は249.5mから249.8mの間にある。幅は上端約5.5m、下端約3.5mで、深さは検出面から約0.8m、表土からは約1.0mである。周溝の堆積土は2層から7層にあたり、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。2層から6層にかけてはパミスが含まれており、特に4・6層ではその量が多い。

墳丘面は、急峻な周溝部分を除いて15°前後の緩い傾斜で墳頂へ続いている。攪乱や時期不明の落ち込み（未調査）がみられるものの、これらの他に目立った凹凸はない。トレンチ北端の南約1.85mから約2.67mの範囲に、帯状にめぐる黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.3m前後であることから、墳端から高さ1.5m前後、斜面距離で4.4m前後の墳丘面は旧表土層と地山層を削って成形したことがわかる。盛土部分は断ち割り調査を行っていないので詳細は不明であるが、表面は互層状の積み上げはみられず、ややくすんだ黄褐色土で覆われていた。トレンチ西壁面で、旧表土層の上に暗黄褐色土や黒褐色土ブロックを確認したが、これらの堆積の経緯は判然としなかった。

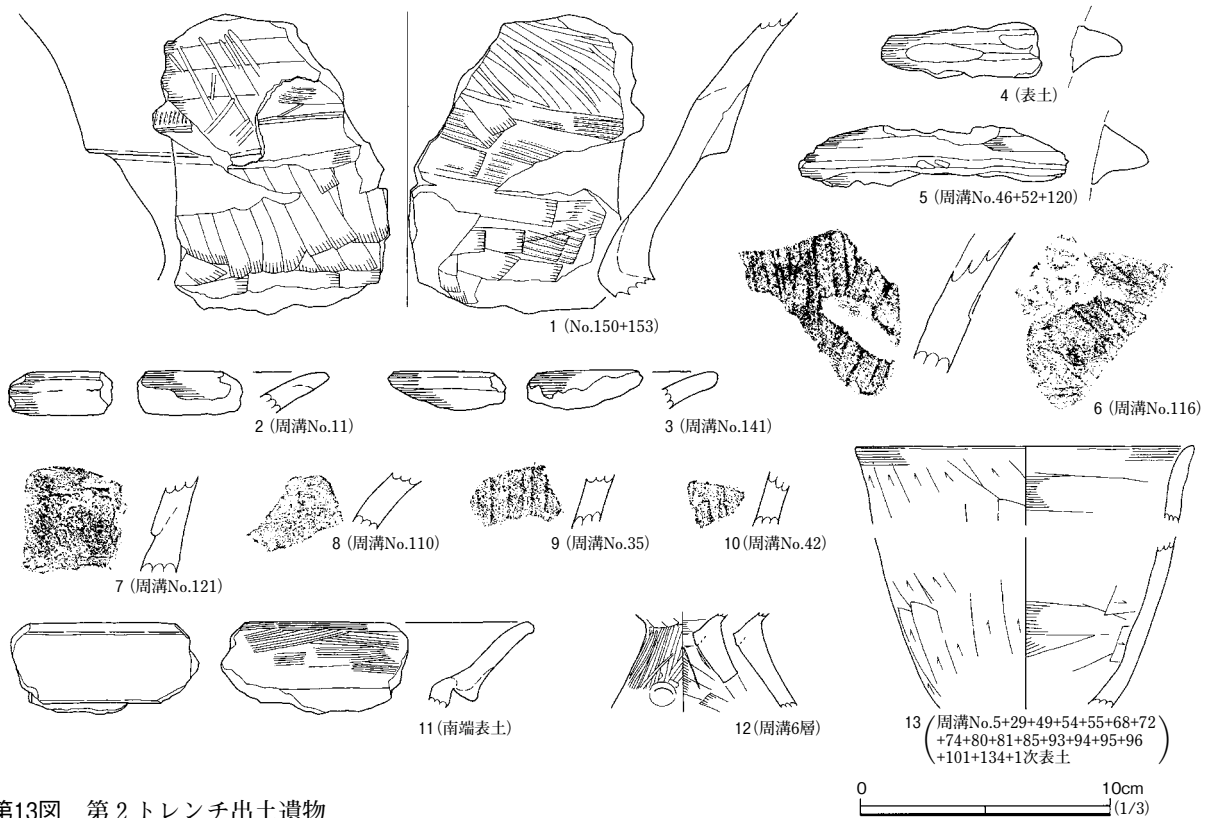
周溝の南側で検出した溝跡は、北西－南東に延びている。幅は東壁際で約0.97m、西壁際で約1.35m



- 第2トレンチ
1. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。現表土層で、篠竹の根や木根の混入著しい。)
 2. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。篠竹の根や木根の混入やや多い。バミスを攪拌状態で微量含む。1より色調暗い。)
 3. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。バミスを攪拌状態で少量含む。)
 4. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。バミスを多量含む、サクサクしている。褐色と黒色のバミスで、褐色のものが多い。)
 5. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。バミス・焼土粒・木炭粒少量、黄褐色ローム粒微量含む。)
 6. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。バミスを多量含む、サクサクしている。褐色と黒色のバミスで、黒色のものが多い。)
 7. 暗黄褐色土 (粘性やや強・しまり弱。くすんだ黄褐色ロームが主体で、底面付近は褐色に近い。)
 8. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。バミスを攪拌状態で少量含む。)
 9. 暗黄褐色土 (粘性・しまり弱。くすんだ黄褐色ロームが主体で、黒褐色土粒少量含む。)
 10. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色ローム粒少量含む。)
 11. 暗黄褐色土 (粘性・しまり弱。くすんだ黄褐色ロームが主体で、9より砂質が強い。)

第12図 第2トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況

第3章 調査報告



第13図 第2トレンチ出土遺物

を測り、北西に向かって広がっている。深さは検出面から約0.58mで、断面形は漏斗状である。堆積土は8層から10層にあたり、8層にはパミスが少量含まれていたが、周溝堆積土のように多量に含まれる層は確認できなかった。溝跡はトレンチ外の西側で周溝と重複する可能性が高いが、それを確認するトレンチを設定しなかったため、新旧関係を把握するまでには至らなかった。なお、当初この溝跡は南東側に隣接する1号溝跡の続きと考えたが、平面図を作成すると南にずれた位置にあり、底面幅や堆積土も異なることから、最終的に別遺構と判断した。

遺物は、201点出土している。出土位置と点数の内訳は、周溝堆積土145点、溝跡18点、周溝部表土29点、墳丘部表土5点、表土4点で、周溝堆積土142点とその他10点の出土位置を記録している。ほとんどが小破片であるが、古墳に伴う壺形埴輪と推定される資料や土師器、赤焼き土器、フレークなどがある。13点図化した。

第13図1～10は、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片資料である。1は墳丘面からやや浮いて出土した。二重口縁壺の口辺から頸部にかけての資料で、頸部から上はほぼ外傾する。段部は疑口縁とならず、粘土紐を張り付けて断面三角形状に成形している。段部が剥離した部分をみると横線が1本引かれており、あらかじめ張り付ける位置を決めたことがわかる。外面は段から上が横方向のナデとミガキ、下が縦方向のナデ、内面は口辺部にミガキ、頸部はハケメの後、横方向のナデが施されている。復原頸部径19.3cm、残存高11.5cmである。2・3はラップ状に開く口縁部片で、内外面ともに横方向のナデが施されている。4・5は頸部あたりから剥離した突帯部資料と思われる。外面はともに横方向のナデが施されている。6・7・9・10は頸部片である。6・9・10は外面に縦方向のナデが、7は外面に帯状

の剥離痕がみられる。8は口辺あたりの破片で、外面に横方向のナデが施されている。7・8・10には僅かに赤彩痕がみられる。同図11はトレンチ南端の表土から出土した土師器二重口縁壺片で、内面にハケメがみられる。同図12は、円形の透かし孔が僅かに残る土師器器台の脚部片である。外面はミガキ、内面にはナデが施されている。同図13は土師器小型鉢で、外面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリ、内面は口縁部がヨコナデ、胴部にナデが施されている。復原口径13.6cm、復原器高10.5cmである。

第3 トレンチ (第14・15図、図版3・7・8)

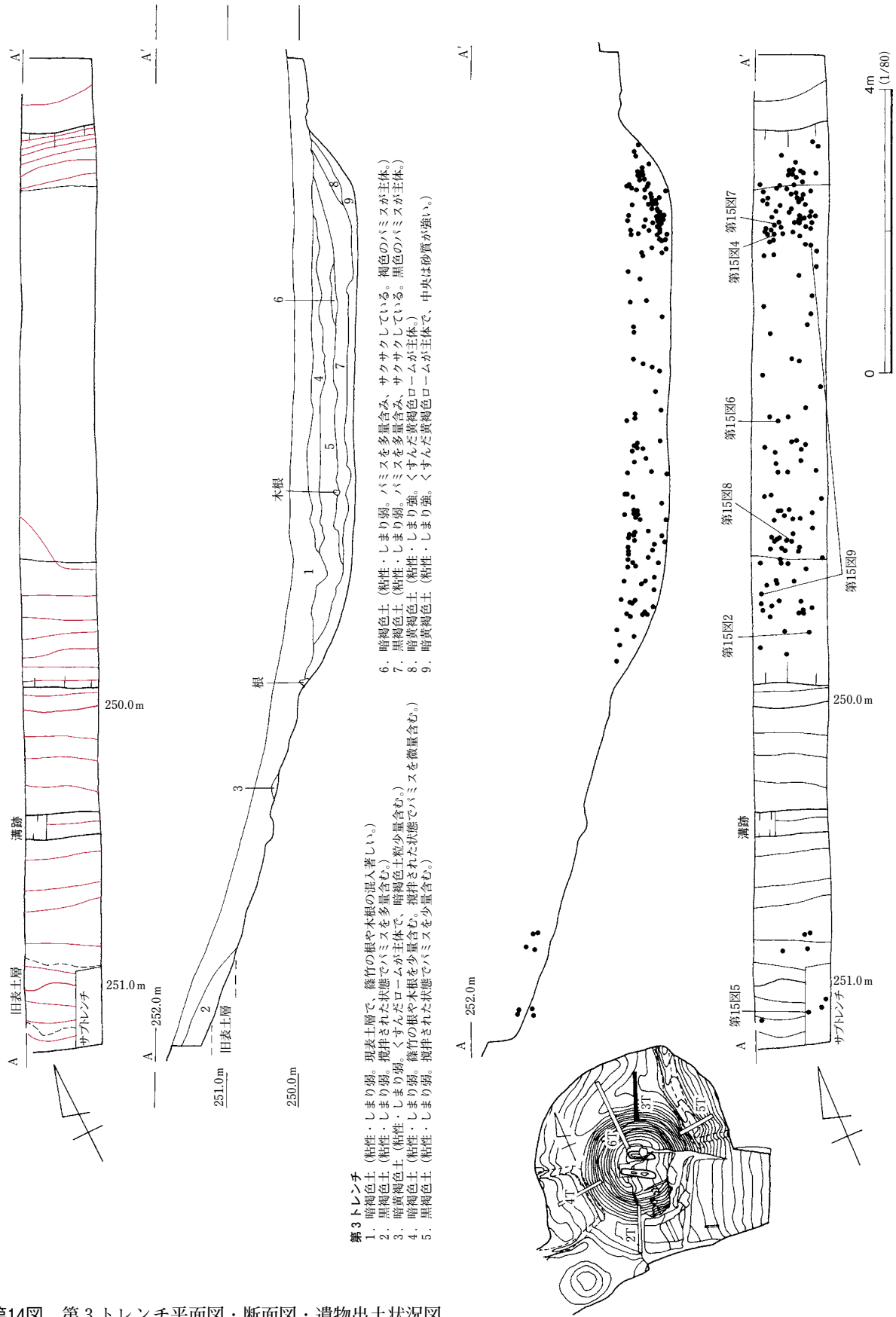
第2トレンチの延長線上、墳丘の北東側に設定した幅約1.0m、長さ約13.8mの南北方向トレンチである。調査面積は約13.8㎡である。ここでは、表土と南端付近の表土下に堆積する黒褐色土を掘り下げ、約28～45cmの深さで墳丘面とこれに続く周溝を検出した。

周溝は、第2トレンチと同様に、地山層の黄褐色ロームと黄褐色砂質ロームを掘り抜き、黄褐色砂礫土まで達している。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともに明瞭で、外側のそれも同様である。下端から上端への立ち上がりの角度は、墳丘側で22°前後、外側で30°前後で、外側がやや急峻である。底面は凹凸がなく、標高249.2mのレベルでほぼ平坦に仕上げられている。幅は上端約7.2m、下端約5.2mで、深さは検出面から約0.6m、表土からは約0.9mである。周溝の堆積土は4層から9層にあたる。これらは、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。4層から7層にかけてはパミスが含まれており、特に6・7層ではその量が多い。

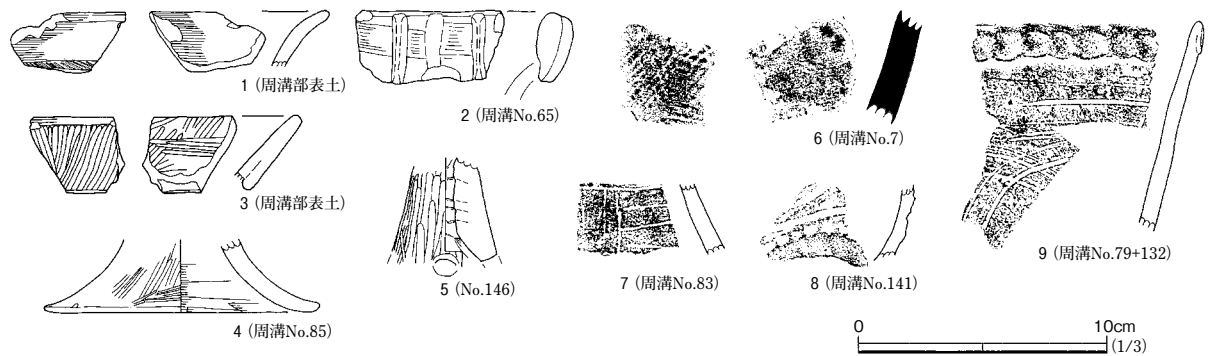
墳丘面は、周溝部分を除いて15°前後の傾斜で墳頂へ続いている。周溝上端から南約1.75mのところで東西に延びる溝跡を検出したが、この溝跡は墳丘面を覆う表土が堆積し、立ち上がりが表土面まで達していないことから掘削時期を特定できなかった。トレンチ南端の北約0.31mから約1.22mの範囲に、帯状にめぐる黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.2m前後であることから、墳端から高さ2.0m前後、斜面距離で6.6m前後の墳丘面は旧表土層と地山層を削って成形したことがわかる。また、第2トレンチでもほぼ同じレベルで旧表土層が確認できたことから、同層は両トレンチ間でほぼ水平に堆積している可能性が高い。盛土は、僅かな範囲で検出したため、詳細は不明である。

遺物は、265点出土している。出土位置と点数の内訳は、周溝堆積土136点、周溝部表土84点、墳丘部表土42点、旧表土層3点で、周溝堆積土136点とその他8点の出土位置を記録している。ほとんどが小破片であるが、古墳に伴う壺形埴輪と推定される資料や縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼き土器などがある。9点図化した。

第15図1は土師器小型壺口縁部片である。内外面ともに横方向のナデが施され、外面下端にはハケメがみられる。同図2は棒状浮文を有する土師器壺口縁部片である。外面に貼り付け前の横方向のナデがみられる。同図3は土師器二重口縁壺片で、内外面ともに丁寧にミガキが施されている。同図4は土師器高環ない器台の裾部片で、外面はミガキ、内面は横方向のナデが施されている。同図5は土師器器台の脚部片で、円形の透かし孔がみられる。外面は丁寧にミガキが施されている。同図6は須恵器甕片で、外面に平行タタキ痕がみられる。同図7・8は弥生土器片である。7は壺頸部片で1本引き沈線で長方形区画の文様が施されている。8は壺口縁部片で沈線とこれに沿う円形の刺突文がみられる。7が中期、8が後期の資料であろう。同図9は、縄文時代後期後半の粗製土器と思われる。



第14図 第3トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図



第15図 第3トレンチ出土遺物

第4トレンチ (第16・17図、図版4・7・8)

墳丘の西側に設定した幅約1.1m、長さ約13.5mの東西方向トレンチである。調査面積は約14.8㎡である。この部分は、墳裾を南北方向に延びてコの字状に西に折れる溝状の落ち込みがあり、この落ち込みに南北を挟まれた部分は周溝の痕跡が不明瞭であった。このため、古墳築造時に溝状の落ち込みを境として、土橋状に掘り残した可能性があり、これを確認することが主な目的となった。調査の結果、表土直下で周溝を検出し、この部分もめぐっていることを確認した。また、溝状の落ち込みも後世の掘削であることが判明した。

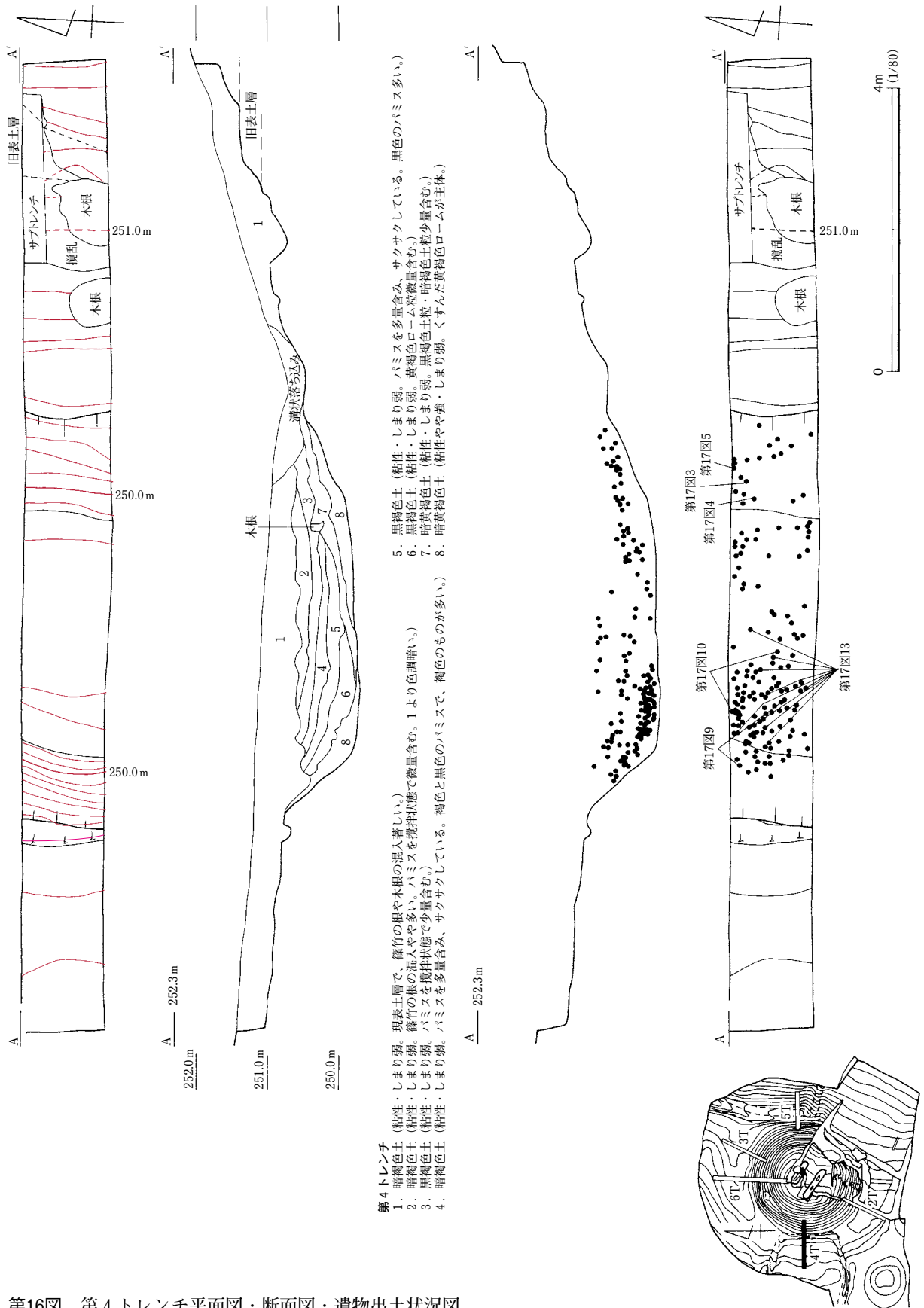
周溝は、第2トレンチと同様に、地山層の黄褐色ロームと黄褐色砂質ロームを掘り抜き、黄褐色砂礫土まで達している。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともに明瞭で、外側のそれも同様である。下端から上端への立ち上がりの角度は、墳丘側で24°前後、外側で42°前後で、外側がかなり急峻である。底面は外側の下端に向かって緩く傾斜し、底面標高は249.7mから249.9mの間にある。幅は上端約5.7m、下端約3.4mで、深さは検出面から約0.9m、表土からは約1.4mである。周溝の堆積土は2層から8層にあたる。これらは、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。2層から5層にかけてはパミスが含まれており、特に4・5層ではその量が多い。

周溝と墳丘面の間、幅65cm前後の平坦面を検出した。この平坦面は、南北に延びる溝状の落ち込みの直下であり、この掘削により形成されたことがわかる。北壁断面では、溝状の落ち込みが表土から掘り込まれていることが判明しており、後世に墳丘面を削って平坦面が造られたことは確実と思われる。

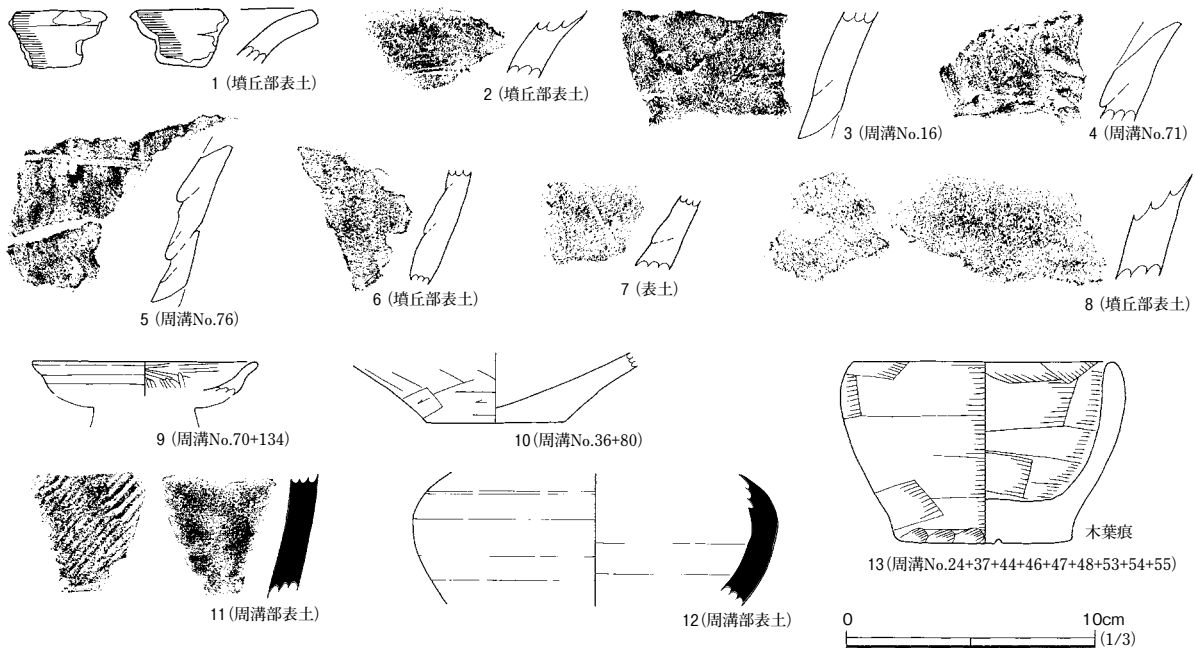
墳丘面は、木根の攪乱による凹凸が著しい。遺存する部分を結んで傾斜を測ると15°前後である。トレンチ東端の西0.55～1.3mと1.58～1.63mの範囲に、帯状にめぐる黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.4m前後であることから、墳端から高さ1.5m前後、斜面距離で3.9m前後の墳丘面は旧表土層と地山層を削って成形したことがわかる。盛土の範囲は僅かなため、詳細は不明である。

遺物は、378点出土している。出土位置と点数の内訳は、周溝堆積土206点、周溝部表土145点、墳丘部表土27点、周溝堆積土151点の出土位置を記録している。他のトレンチ同様、ほとんどが細片であるが、古墳に伴う壺形埴輪と推定される資料や土師器、須恵器、赤焼き土器などがある。13点図化した。

第17図1～8は、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片資料である。1はラッパ状に開く口縁部片で、内外面ともに横方向のナデが施されている。外面には僅かに赤彩痕がみられる。2は口辺部片と思われ、内外面ともに横方向のナデがみられる。3・4・6～8は胴部片で、8を除いて内面に粘土の積み上げ



第16図 第4トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図



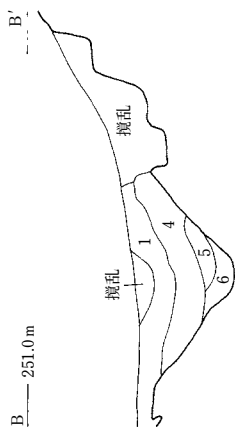
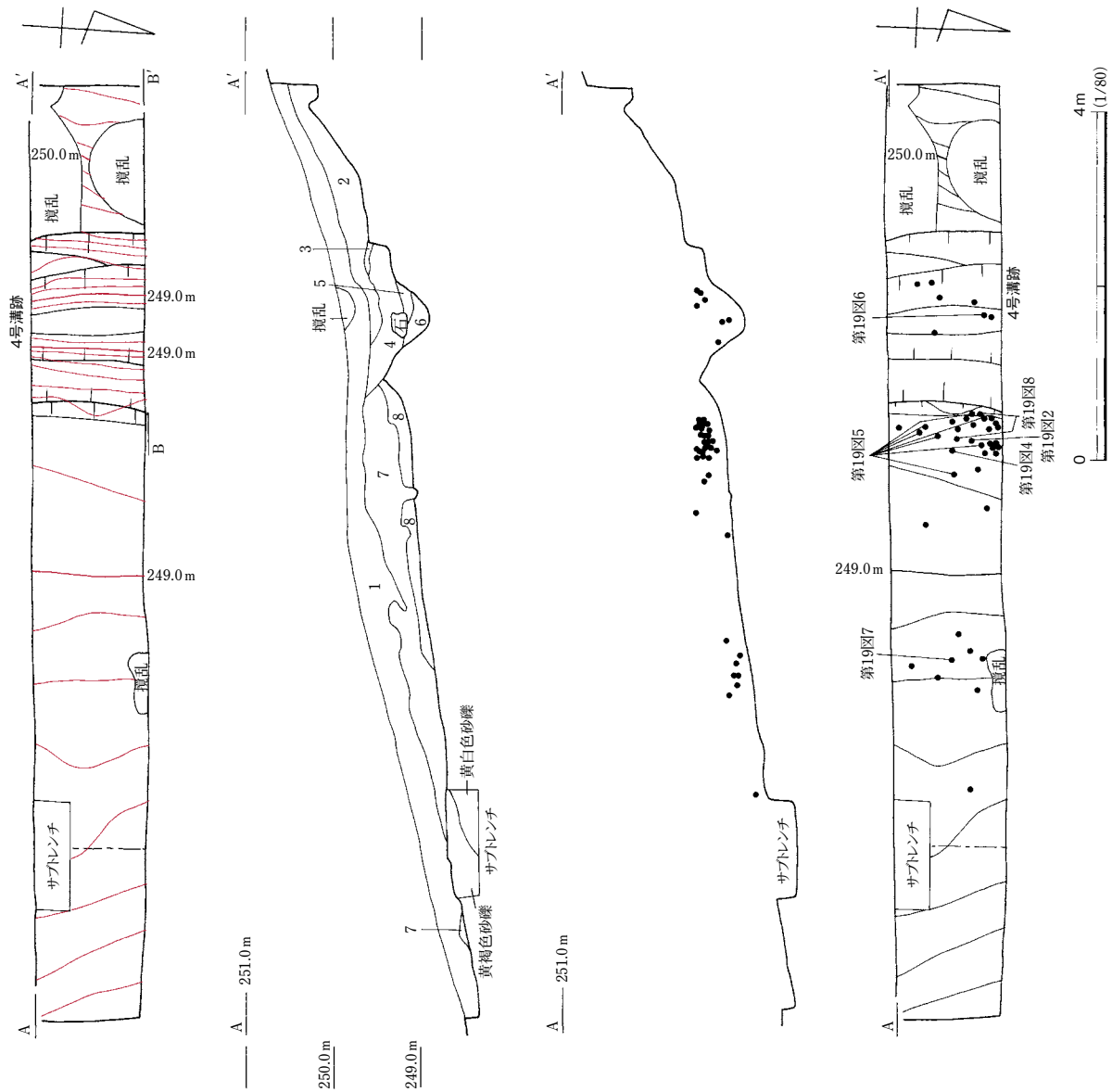
第17図 第4トレンチ出土遺物

による凹凸がくっきりと残っている。5は頸部片と思われる。上半には横方向に沈線が引かれており、突起物を貼り付ける際の目印の可能性はある。内面は粘土の積み上げによる凹凸が著しい。同図9は土師器器台の受け部で、体部外面に段を有する。内面はミガキが施されている。同図10は土師器甕の底部片で、外面にヘラケズリが施されている。同図11は平行タタキ痕が残る須恵器甕片、同図12は須恵器はそうないし壺片である。同図13は土師器小型鉢で、内外面ともにヘラナデが施され、外面の底部周縁にはユビナデがみられる。底部外面は木葉痕である。復原口径10.5cm、器高7.2cmである。

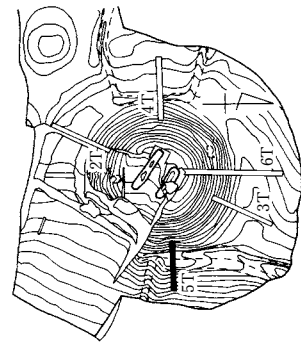
第5トレンチ (第18・19図、図版4・7)

第4トレンチの延長線上、墳丘の東側に設定した幅約1.3m、長さ約10.6mの東西方向トレンチである。調査面積は約13.7㎡である。この部分は、墳丘の等高線が全体的に西に寄った状態で直線的にまわっている。裾には墳丘を削るように南北方向に延びて、北側が測量範囲外へ抜ける旧道が存在しており、これにより東西方向で幅3m前後の平坦面が形成されている。また、旧道の東側は、台地から下る東向き斜面が続いており、これらによって周溝の痕跡が全く確認できない状況であった。このため、ここでは周溝の有無を確認することや墳丘斜面の状態を明らかにすることが主な目的となった。調査の結果、表土直下で周溝とこれを切る溝跡を検出したが、周溝は他のトレンチとは若干様子が異なっていた。

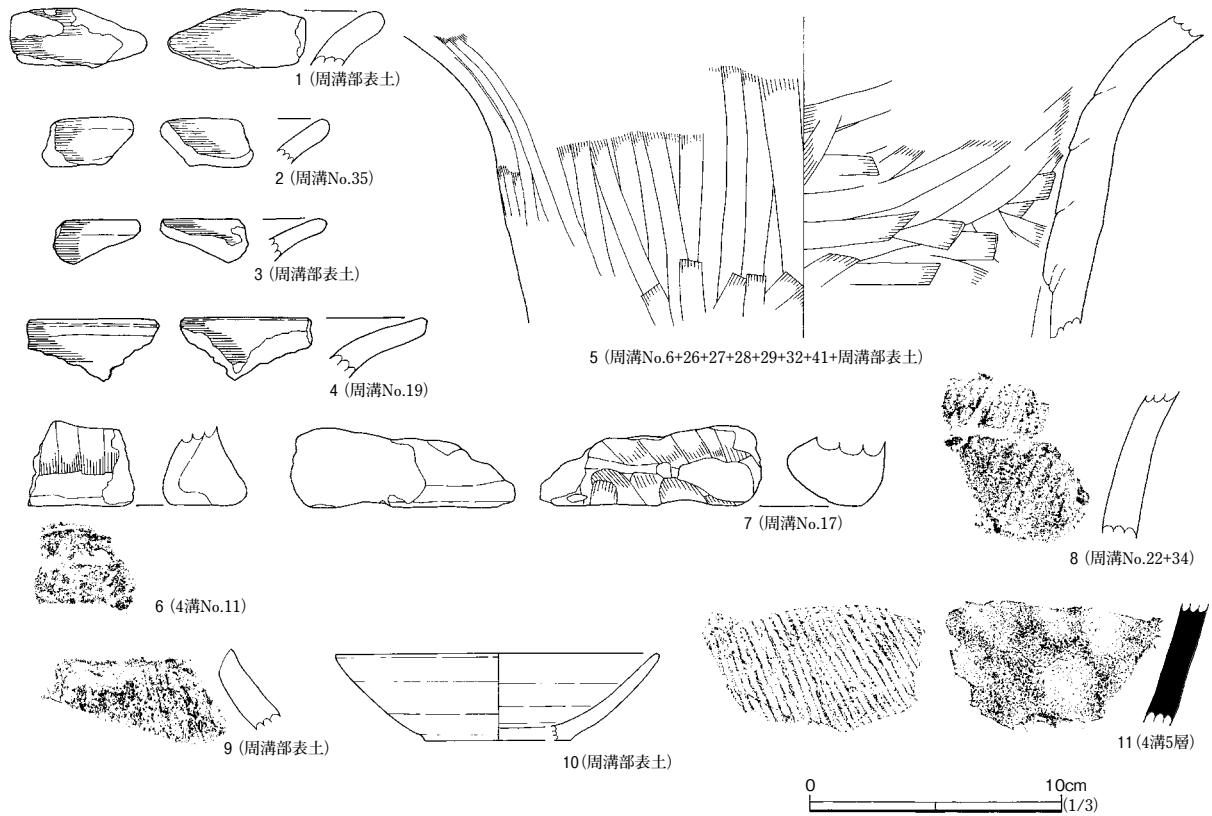
溝跡は、トレンチ西寄りの旧道平坦面下で検出した。旧道と同様に墳裾を南北方向に延びており、西側で墳丘面を、東側で周溝を切っている。幅は南壁際で約1.85m、北壁際で約2.13mを測り、北側がやや広がっている。深さは検出面から約0.72mである。断面形はV字状であるが、両壁面には崩落による段がみられ、特に墳裾側にあたる西側が顕著である。堆積土は2～6層にあたり、2・4層には少量のパミスが含まれていた。この溝跡は、第1次発掘調査の際に東側削平部の北側法面で断面のみを確認した4号溝跡の延長線上にあり、断面形も類似していることから同溝跡の続きと思われる。なお、掘削時



- 第5トレンチ**
 暗褐色土 (粘性・しまり弱。現表土層で篠竹の根や木根の混入著しい)
 1. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。ローム粒少量、バミス微量含む)
 2. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。ローム粒少量、バミス微量含む)
 3. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。ローム粒少量含む、サクサクしている)
 4. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。バミスを少量含む、サクサクしている)
 5. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色砂プロック少量、粒の粗い黒色砂礫少量含む)
 6. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色砂粒少量、粒の粗い黒色砂礫少量含む)
 7. 黒褐色土 (粘性・しまり弱。上位に攪拌された状態でバミスを多量含む、サクサクしている。下位は黄褐色砂粒含む)
 8. 暗黄褐色土 (粘性・しまり弱。黄褐色砂礫を多量含む)



第18図 第5トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図



第19図 第5トレンチ出土遺物

期については、古墳より新しいことはわかるが、詳しい年代は不明である。

周溝は、溝跡の東側で検出した。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともに確認できたが、上端は溝跡に壊されて僅かに遺存する程度である。また、東向き斜面に造られているためか、底面はそれに沿うように検出され、堆積土も東に向かって徐々に薄くなっていたため、外側の上端と下端は確認できなかった。このため、堆積土が確認できる部分を外側の範囲と捉え、平面図にはそれを一点鎖線で示した。墳丘側の下端から上端への立ち上がりの角度は、 20° 前後である。底面標高は248.7mから249.2mの間にある。周溝の堆積土は、7・8層にあたり、ともに斜面に沿って徐々に薄くなることから、自然堆積と思われる。分層はできなかったが、7層の上半にはパミスが多量に含まれていた。堆積土の遺存状態から推定できる幅は最大で5m前後で、深さは墳丘側の立ち上がり付近で検出面から約0.5m、表土からは約0.7mである。

墳丘面は、北壁際と南壁際に木根などの攪乱があり、凹凸が著しい。遺存する部分を結んで傾斜を測ると 20° 前後である。他のトレンチでは 15° 前後であることから、溝跡や旧道の掘削の際に削られて傾斜がきつくなったものと思われる。なお、このトレンチでは旧表土層が確認できる部分まで延長していないが、掘り下げた範囲では地山層を削って成形している。

遺物は、91点出土している。出土地点と点数の内訳は、周溝堆積土37点、周溝部表土40点、溝跡堆積土14点である。他のトレンチ同様、いずれも細片であるが、古墳に伴う壺形埴輪と推定される資料や土師器、須恵器、赤焼き土器などがある。

第19図1～9は、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片資料である。1～4はラッパ上に開く口縁部

第3章 調査報告

片で、いずれも内外面ともに横方向のナデが施されている。1の外面は一部赤褐色を呈しているが、赤彩なのか判断できなかった。5は、頸部上半から口辺にかけての資料である。外傾しながら立ち上がり、上半で大きく外反する器形である。外面は縦方向のナデ、南面は横や斜め方向のナデが施されている。器壁の厚さは1.4~1.9cmで、内面は積み上げ痕が明瞭である。頸部上半の復原径は約26cmである。6・7は、粘土紐を輪状にして、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部の破片である。6は外面にナデ、7はナデとユビナデが施されている。8は頸部片、9は胴部上半の破片で、ともに外面に縦方向のナデが施されている。同図10は、赤焼き土器坏である。器高3.5cm、復原口径13.0cmである。同図11は外面に平行タタキ痕、内面に当て具痕がみられる須恵器甕片である。

第6 トレンチ (第20・21図、図版5・7)

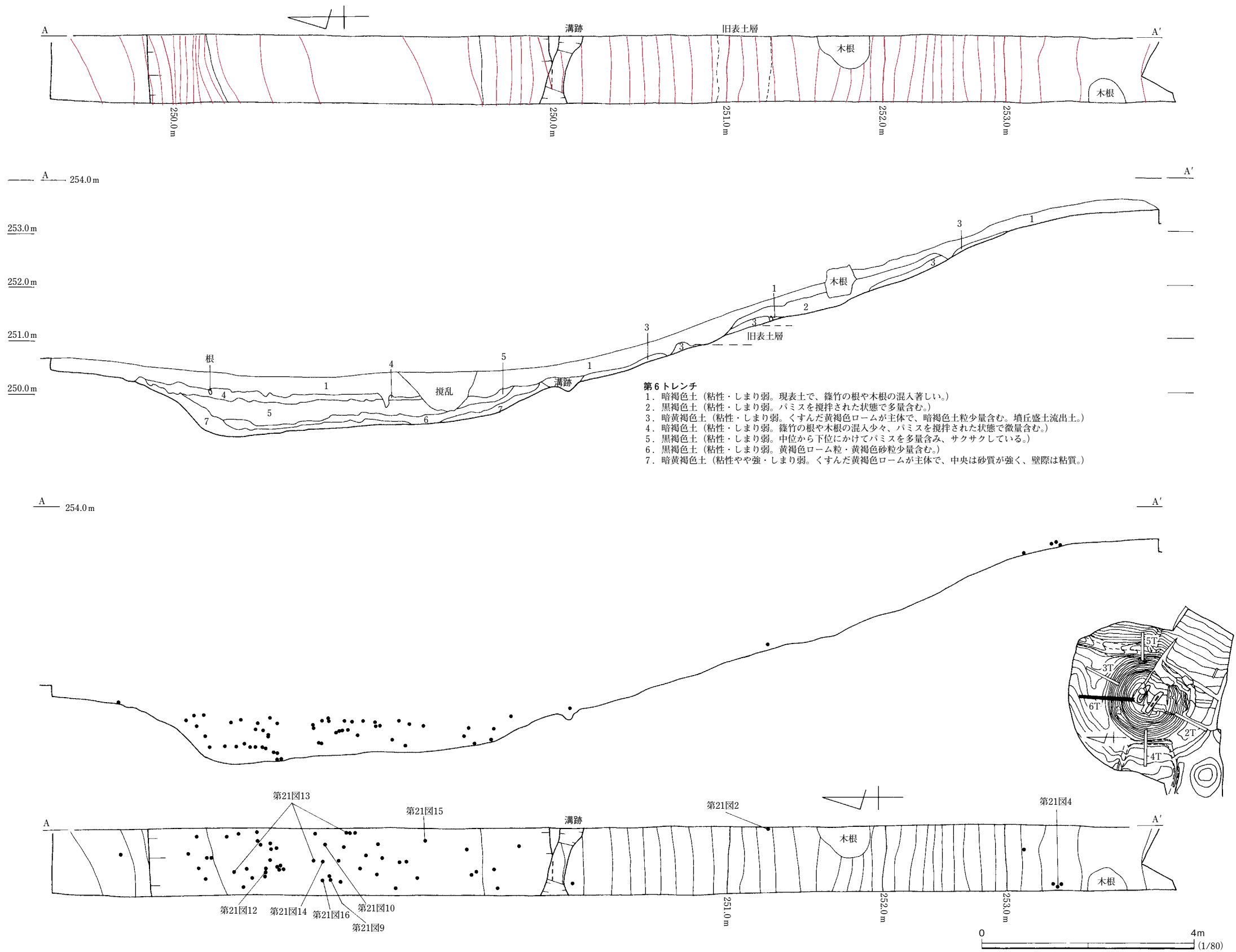
第1トレンチの延長線上、墳丘の北側に設定した幅約1.2mの南北方向トレンチである。段築や旧表土層を確認するため墳頂まで調査範囲を延長し、最終的に約20.3mの長さとなった。調査面積は約24.3㎡である。ここでは、墳頂までトレンチを延長し、表土と墳丘面の表土下に部分的に堆積する黒褐色土や暗黄褐色土を掘り下げ、約18~47cmの深さで墳丘面とこれに続く周溝を検出した。

周溝は、東側に隣接する第3トレンチと同様に、地山層の黄褐色ロームと黄褐色砂質ロームを掘り抜き、黄褐色砂礫土まで達している。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともにやや不明瞭で、外側のそれはともに明瞭である。下端から上端への立ち上がりの角度は、墳丘側で15°前後、外側で35°前後で、外側が急峻である。底面は細かな凹凸はなく、外側の下端に向かって緩く傾斜している。底面標高は249.2mから249.5mの間にある。幅は上端約7.5m、下端約5.0mで、検出面からの深さは外側の下端付近で約0.9m、表土からは約1.2mである。周溝の堆積土は4層から7層あたり、これらはレンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。4・5層にはパミスが含まれており、特に5層の中位から下位でその量が多い。

墳丘面は、標高251.3mから251.6mの間が若干緩くなるが、周溝部分と同様に15°前後の傾斜で墳頂へ続いている。周溝上端部分では、これを切る東西方向の溝跡を検出したが、この溝跡は第3トレンチで確認した溝跡と方向が一致しており、同一の溝跡の可能性が高い。トレンチ南端の北約7.52mから約8.51mの範囲に、帯状にめぐる黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.3m前後であることから、墳端から高さ1.8m前後、斜面距離で6.0m前後の墳丘面は旧表土層と地山層を削って成形したことがわかる。盛土部分は断ち割り調査を行っていないので詳細は不明であるが、表面はややくすんだ黄褐色土で覆われており、互層状の積み上げはみられなかった。

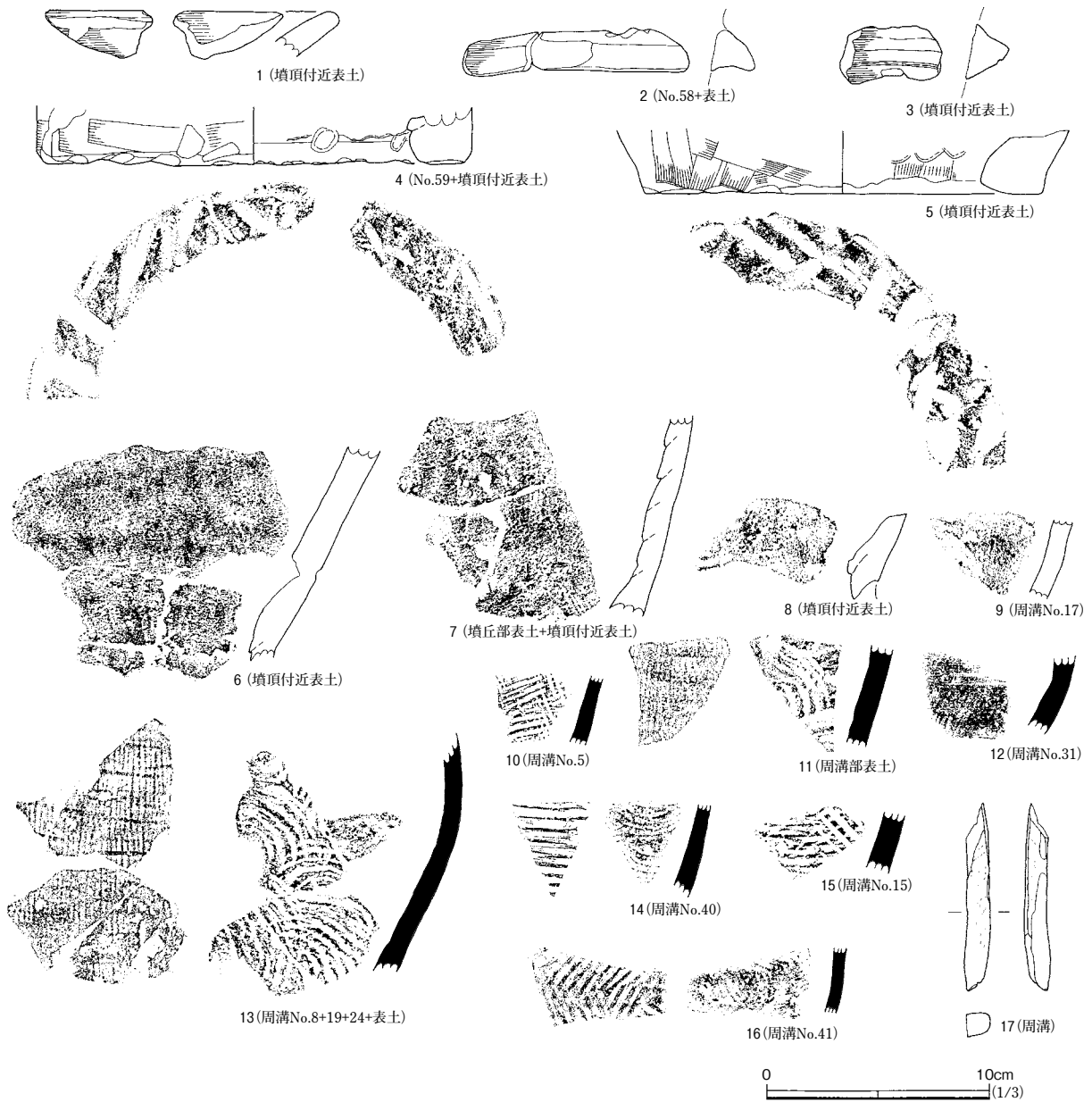
遺物は、140点出土している。出土位置と点数の内訳は、周溝堆積土55点、周溝部表土16点、墳丘部表土19点、墳頂付近表土50点で、周溝堆積土53点とその他6点の出土位置を記録している。ほとんどが小破片であるが、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片や土師器、須恵器、砥石などがある。17点図化した。なお、墳頂付近表土としたものは、出土位置を記録せずに取り上げてしまったが、墳頂平坦面から墳丘斜面に移行するあたりで出土したものである。

第21図1~9は、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片である。1はラッパ状に開く口縁部片で、内外面ともに横方向のナデが施されている。2・3は、頸部あたりから剥離した突帯部資料と思われる。



第20図 第6トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図

第1節 周溝・墳丘下部



第21図 第6トレンチ出土遺物

外面はともに横方向のナデが施されている。4・5は粘土紐を輪状にして、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部資料である。ともに内外面にナデやユビオサエが施され、外底面には丸棒状の圧痕がみられる。どちらも歪みが激しいが、復原底径は4が19.4cm、5が18.0cmである。6・7・9は胴部片で、いずれも外面に縦方向のナデが施されている。7の内面は積み上げによる凹凸が顕著である。8は頸部片で、外面に縦方向のナデが施されている。同図10～16は須恵器甕片である。10・12・14・15・16は平行タタキ痕、11・13は格子タタキ痕が外面にみられ、11・13・14・16の内面には同心円状の当て具痕が残る。同図17は、砥石片である。二面に使用痕がみられる。

第2節 埋葬施設

第1次発掘調査で検出した墳頂削平部の北寄りに位置する木棺陥没坑について、その掘方検出作業を改めて実施した。また、懇談会において、この陥没坑が墳頂部の北寄りに位置し、南側に別の埋葬施設が存在する可能性が高いことが指摘されていたことから、この確認作業も改めて実施した。その結果、陥没坑の掘方を検出するとともに、その南側で新たに別の埋葬施設を1基確認した。

第1埋葬施設（第22図、図版5・6）

墳頂削平部の北寄りで検出した木棺陥没坑を伴う埋葬施設である。第1次発掘調査では掘方を確認できなかったため、改めて陥没坑周辺の精査と陥没坑を切る1号攪乱坑の壁面精査を行った。陥没坑周辺の精査では、プランの確認は厳しい状況が続いたが、1号攪乱坑の西壁面を複数回精査したところ、現墳丘面から20cm前後の深さで掘方北側の立ち上がりとみられる土層の境界を確認した。境界の北側は黄白色砂粒を多量に含む黄褐色土、南側は黄白色砂粒を含まない暗黄褐色土であった。さらに、この境界を追って攪乱坑の底面を精査すると、平面的に東西方向へ延びることが確認できたことから、掘方と墳丘盛土の境界であることを確信した。しかし、前述のとおり、西側壁面では現墳丘面から20cm前後掘り下げないと平面的に境界を確認することが困難であったため、壁面から西に向かって小トレンチA～Cを設定し、AからCの順に境界が明瞭となる深さまで掘り下げ、平面プラン確認した。その結果、トレンチBでは北西コーナー、トレンチCでは南西コーナーを確認できた。その後、黄白色砂粒の有無が境界となることを念頭に置きながら、南側と東側のプランを確認すべく、再び精査を行ったところ、比較的容易に境界が判明し、全体プランを把握した。

この埋葬施設掘方の規模は、長さ約7.3m、幅約2.0mで、主軸方向はN54°Eである。1号攪乱坑の南側壁面をみると、粘土等の痕跡は確認できないことから、木棺直葬の可能性が高い。

第2埋葬施設（第22図、図版6）

墳頂削平部の南寄りで検出した埋葬施設で、第1埋葬施設の南約3mのところの位置する。この辺りは第1次発掘調査で掘り下げた複数列の重機のキャタピラー痕が東西方向に延びており、墳丘盛土の状態が一様でなかった。このため、全体的にキャタピラー痕の底面レベルまで掘り下げて、北から南に向かって精査を行った。その結果、黒褐色土ブロック混じりの黄褐色土の広がりの中に、黒褐色土を含まない暗黄褐色土が東西方向に広がっているのを確認し、その中央に陥没坑と思われる不整形な落ち込みを2箇所検出できたことから、この広がりが新たな埋葬施設掘方プランと認識した。東端は削平部内で検出できたが、西端は削平部を超えて西に延びていたことから、第7トレンチを設定し、西端検出作業を継続した。表土下の墳丘盛土最上面ではプランを確認できなかったため、徐々に掘り下げたところ、西壁面で盛土最上面から約20cm、表土からは約40cmの深さで、ようやく西端のプランも確認できた。

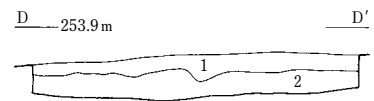
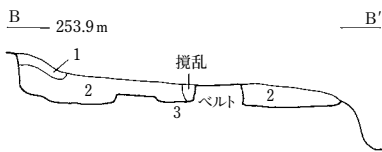
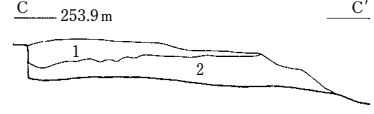
この埋葬施設掘方の規模は、長さ約10m、幅約2mで、主軸方向はN56°Eである。下部の遺存状態は不明であるが、長大なプランであることから、こちらにも木棺が納められているものと思われる。



第1埋葬施設
A—253.9m



第7トレンチ
C—253.9m

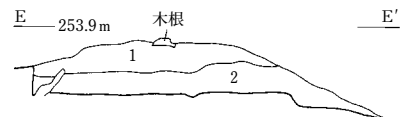


第1埋葬施設と陥没坑

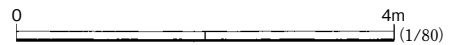
1. 暗褐色土 (現表土層で、篠竹の根の混入著しい。)
2. 暗黄褐色土 (盛土最上層で、くすんだ黄褐色ロームが均一に積まれている。混入土なし。)
3. 暗黄褐色土 (混じりけの少ない暗黄褐色土。)
4. 暗黄褐色土 (砂質)
5. 黄褐色土 (黄白色砂多量含む。)

第7トレンチ

1. 暗褐色土 (粘性・しまり弱。現表土層で、篠竹の根や木根の混入著しい。)
2. 暗黄褐色土 (盛土最上層で、くすんだ黄褐色ロームが均一に積まれている。根の混入あり。)



※等高線は現況測量図のものを使用



第22図 埋葬施設平面図・断面図

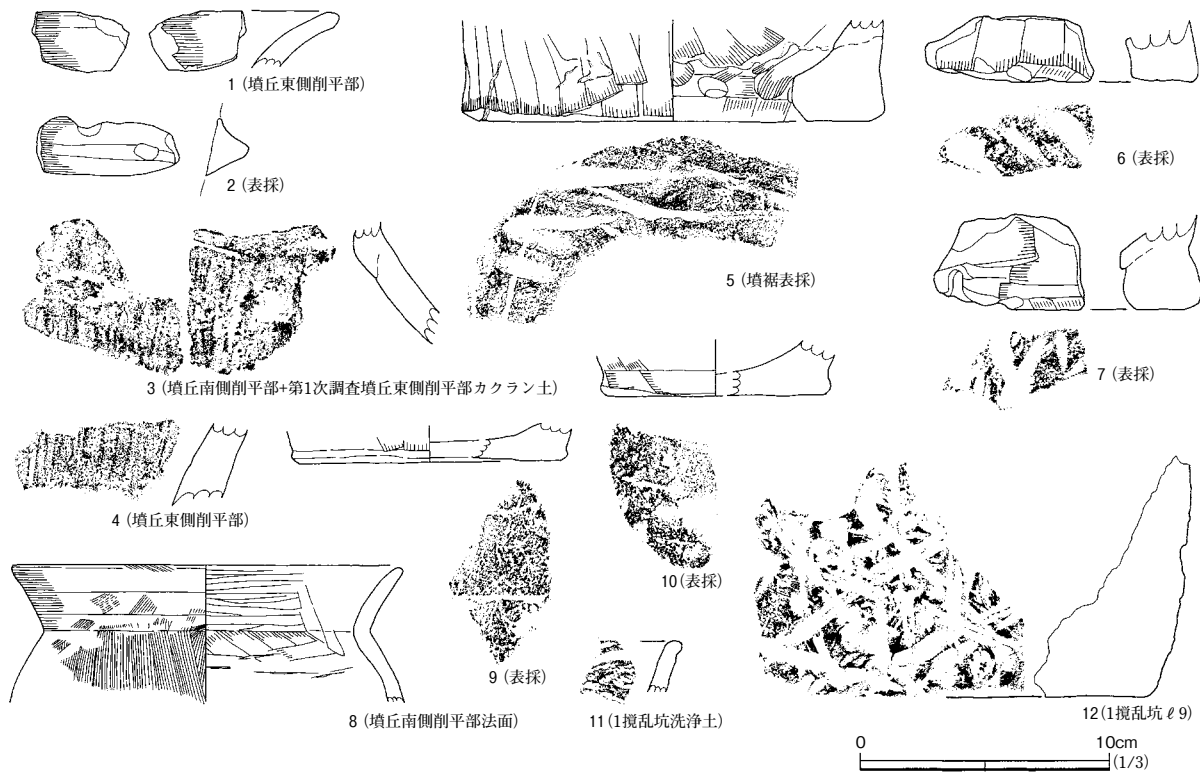
第3節 遺構外出土遺物

今回の調査では、第1次発掘調査で精査を行った墳丘周辺の削平部を再び複数回精査しており、これによって出土した遺物や古墳周辺で表採した資料を遺構外出土遺物として扱った。また、第1次発掘調査で出土した遺物を改めて精査したところ、実測可能なものがあったため、これらについても遺構外出土遺物として掲載した。

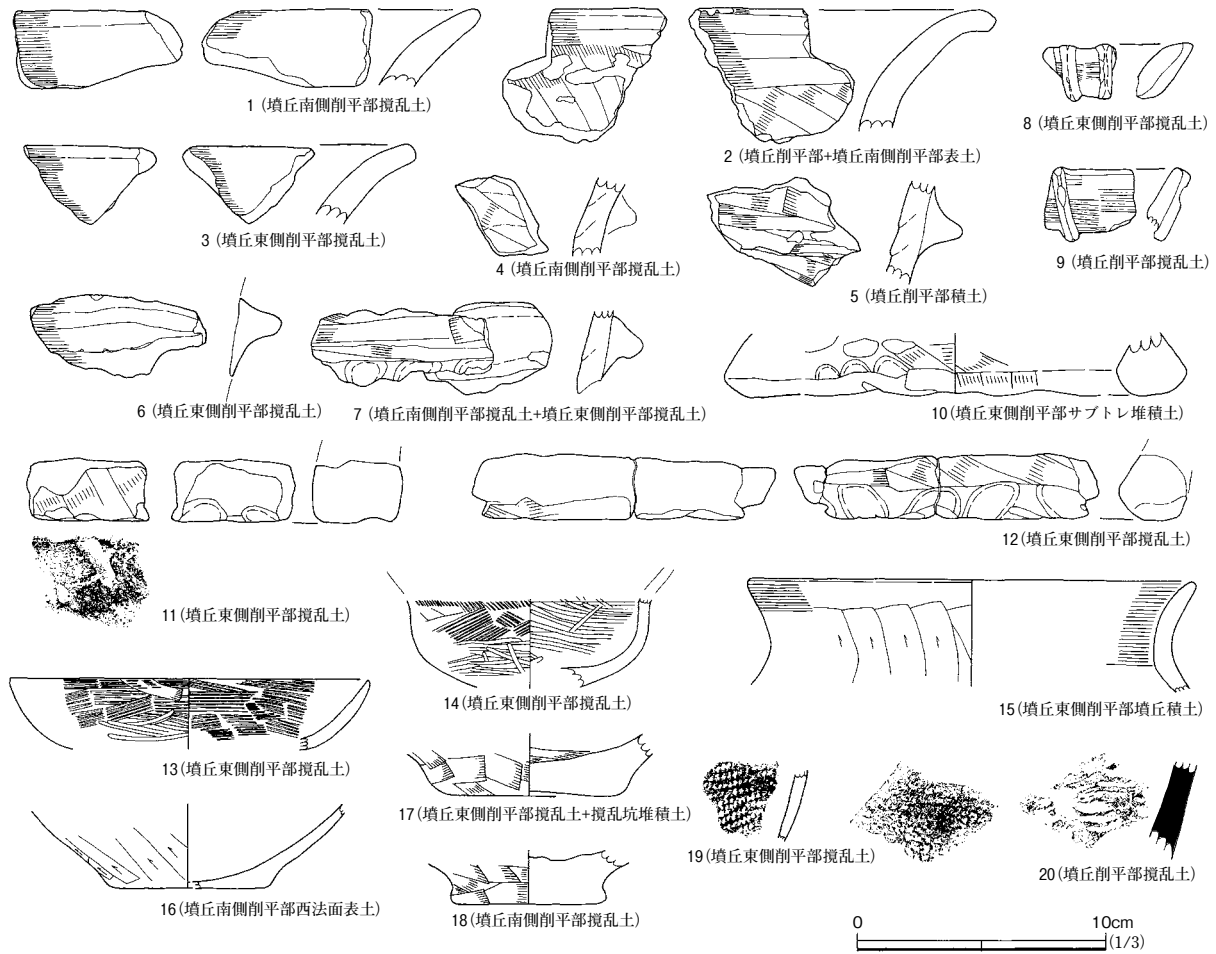
第2次発掘調査遺構外出土遺物（第23図、図版7・8）

表採資料も含めて、総数は148点である。古墳に伴う壺形埴輪と推定される資料や弥生土器、土師器、赤焼き土器などがある。なかには、第1次発掘調査の出土品と接合した破片もある。12点図化した。

第23図1～7は、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片である。1はラッパ状に開く口縁部片で、内外面に横方向のナデが施されている。2は、頸部あたりから剥離した突帯部資料と思われる。外面に横方向のナデが施されている。3・4は胴部片で、ともに縦方向のナデが施されている。5～7は粘土紐を輪状にして、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部資料である。いずれもナデが施され、外底面には丸棒状の圧痕がみられる。歪みがひどいが、5の復原底径は16.0cmである。同図8は土師器甕口縁部片で、外面は口縁部にヨコナデ、胴部にハケメ、内面は口縁部がミガキ、胴部にヘラナデが施されている。同図9・10は、土師器甕の底部片である。ともに外面にナデが施され、外底面には木葉痕がみられる。同図11は1号攪乱坑の洗浄土から出土した弥生土器口縁部片で、沈線と縄文が施されている。同図12は1号攪乱坑の洗浄土から出土した弥生土器口縁部片で、沈線と縄文が施されている。



第23図 第2次調査遺構外出土遺物



第24図 第1次発掘調査出土遺物

同図12は、1号攪乱坑から出土した土製品である。外面に竹管による籠目状の圧痕がみられる。

第1次発掘調査出土遺物（第24図、図版8）

第24図1～7・10～12は、古墳に伴う壺形埴輪と推定される資料である。1～3はラッパ状に開く口縁部片で、1・3にはともに内外面に横方向のナデが施されている。2は内外面ともに横方向のナデと斜め方向のナデが施されている。4は頸部片で、外面に横方向の剥離痕がみられる。5～7は、頸部あたりに貼り付く突帯部資料と思われる。いずれも外面に横方向のナデが施されている。6は本体から剥離しているが、5・7は僅かに本体部分が残っている。10～12は粘土紐を輪状にして、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部資料である。いずれもナデやユビオサエが施されている。10の復原底径は18.2cmである。同図8・9は棒状浮文を有する土師器壺口縁部片である。ともに外面に貼り付け前に施されたハケメがみられる。同図13は土師器埴口縁部片で、外面はハケメの後ミガキとナデが施され、内面にはハケメがみられる。同図14は土師器埴の体部片で、外面にはハケメとミガキ、内面にはミガキが施されている。同図15は、土師器甕口縁部片である。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリ、内面はヨコナデが施されている。同図16～18は、土師器甕底部片である。16は外面にヘラケズリ、17・18は外面にナデが施されている。同図19は縄文土器で、LR縄文が施されている。同図20は須恵器甕片で、外面に平行タタキ痕、内面に同心円状の当て具痕がみられる。

第4章 まとめ

今回の調査は、第2章第3節で記した課題などを解決することが主な目的であった。ここでは、各トレンチの調査成果を踏まえつつ、改めて21号墳の2次にわたる調査で明らかとなった事項を記載する。

墳形 当古墳は、これまで円墳とする認識（梅宮 1964）と方墳とする認識（柳沼・押山・仲田 1991）が示されていた。第1次発掘調査の現況測量では、墳丘北東側から北・西を経て南西側あたりまで、等高線がほぼ等間隔で円弧状にまわることが確認された。また、今回、同所に設定した複数のトレンチにおいても、現況測量図とおおむね同様な等高線の流れが確認され、段築のない円墳であることが確実となった。なお、墳丘東側は他と若干異なり、等高線が全体的に西に寄った状態で、直線的にまわっているが、この点については、第5トレンチにおいて現状のみかけの墳端から東へ1.8m前後離れた位置で、本来の墳端にあたる周溝内側の下端が確認されたことから、南北に延びる旧道の造成やその下で確認された4号溝跡の掘削などにより、墳丘面が一定の範囲で削平されたことに起因するものと考えられる。

墳丘 墳頂部まで延長した第6トレンチ以外は、墳丘下部の限定された所見となる。第1次発掘調査では、削平により露出した墳丘東側断面の観察から、旧表土層の上に盛土していることが確認されていた。今回、第2～4・6トレンチで帯状にめぐる旧表土層を墳丘面のかなり高い位置で検出し、当古墳は下半部を旧表土層と地山層の削り出し、上半部を盛土で築成していることが確定した。墳端から旧表土層上面までの高さは、第2～4・6トレンチで1.5～2.0m、同じく盛土の厚さは2.0～2.1mであることから、かなり広い範囲で削り出しが行われていることがわかる。墳丘面の傾斜は、第5トレンチでは削平の影響からか20°前後となっているが、他のトレンチでは周溝内側の上端から上は15°前後であった。ほぼ同様な勾配で墳頂部へ向かっていることから、削平部と墳丘東側を除けば、墳丘面は比較的築造時に近い状態を残しているものと思われる。なお、盛土部分は、断ち割り調査を行っていないので、詳細は不明であるが、表面には互層状の積み上げがみられないことから、外表部分は混じりけの少ない土で覆った可能性が高い。

周溝 現況測量図では、周溝の痕跡と思われる窪地状の地形がはっきりと表れている部分と不明瞭な部分があったが、設定したすべてのトレンチで検出されたことから、削平によってその有無自体がわからない墳丘南東側を除いて、ほぼ全周することが確認された。ただし、墳丘東側の第5トレンチでは、内側の上・下端や他のトレンチの周溝堆積土と似た堆積土が確認できたものの、底面が東に向かって傾斜し、そのまま自然地形へ移行しており、外側の立ち上がりが判然としなかった。このため、墳丘東側の台地から下る斜面部では、外側の立ち上がりが流失している可能性がある。上端と下端の傾斜変換線は、第5トレンチを除けば内側・外側ともに比較的明瞭である。立ち上がりの角度は内側が15～40°、外側が20～42°で、場所によって相当異なる。幅は、墳丘北東側から北側が7.2～7.5m、西側から南西側が5.5～5.7m、上面が削平されている墳丘南側が4.5～6.2mで、概して北側が広く、西側が狭いようである。また、検出面からの深さは、墳丘北東側から北側が0.6～0.9m、西側から南西側が0.8～0.9m

で、西側が比較的深く掘り込まれている。堆積土はおおむね3層に大別でき、底面直上が黄褐色系土、その上が黒褐色系土、最上層が暗褐色系土となっている。暗褐色系土と黒褐色系土には白色・褐色・黒色のパミスが含まれているが、特に黒褐色系土に多量に含まれている。なお、11～13・15号墳の調査では、周溝堆積土の中に白色パミスが純層に近い状態で堆積していることが確認されたが、当古墳ではそのような堆積状況は確認できなかった。

規模 第1次発掘調査では、測量調査で得られたみかけの大きさとして、墳丘規模34m前後、周溝外周を含めると最大で48m前後、墳丘高は西側からみると2.7m前後、北側からは3.2m前後、東側からは3.4m前後と報告した。今回、最も築造時の姿に近いと思われる位置に第2トレンチと第3トレンチを設定し、掘り下げた結果、両トレンチともに墳端にあたる周溝内側の下端が確認された。これを基準に計測すると、墳丘規模（墳端間）は径約37m、周溝外側の先端まで含めると径約47mとなった。また、墳丘高（墳端からの高さ）は、第2トレンチで約3.6m、第3トレンチで約4.2mを測り、この内、盛土の厚さは両トレンチともに2.1m前後の数値を得た。当墳は、正直古墳群の中では最大規模の円墳であることが改めて確認された。

埋葬施設 墳頂削平部で2基検出された。北側に位置する第1埋葬施設は、第1次発掘調査で陥没坑が検出されていたもので、掘方の規模は長さ約7.3m、幅約2.0m、主軸方向はN54°Eである。この埋葬施設と重複する1号攪乱坑の南側壁面をみると、粘土等の痕跡は認められないことから、木棺直葬の可能性が高い。第2埋葬施設は、第1埋葬施設の南側約3m離れた位置で、第1埋葬施設とほぼ並行するように検出された。掘方の規模は長さ約10m、幅約2mで、主軸方向はN56°Eある。この埋葬施設も陥没坑を伴うことから、第1埋葬施設と同様に木棺が納められているものと思われる。

築造時期 古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片資料が、各トレンチから出土しているもので、これらから推測したい。この中で、最も壺形埴輪の特徴を表しているものは、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部資料である。第5トレンチの2点（第19図6・7）、第6トレンチの2点（第21図4・5）の他、第2次発掘調査遺構外出土資料3点（第23図5～7）、第1次発掘調査出土資料3点（第24図10～12）などがある。これらの類例は神奈川県長柄桜山古墳群第1号墳、茨城県上出島2号墳、県内ではいわき市玉山古墳などにみられ、長柄桜山古墳群第1号墳では前期後葉に、上出島2号墳では前期末葉から中期初頭に、玉山古墳では前期後葉から末葉に位置づけられている。次に特徴的なものは、第2トレンチから出土した二重口縁壺の口辺から頸部にかけての資料（第13図1）である。胴部や底部が出土していないため詳細は不明であるが、頸部はほぼ外傾し、段部内外面は屈曲をほとんど持たず、段部は粘土紐を貼り付けて断面三角形に成形している。器面調整は最終的にナデを施す。類例はほとんどみられず、細部において違いは多いものの、段部がほぼ屈曲を持たないことや粘土紐の貼り付けで段部を作出している点からすれば、長柄桜山古墳群第1号墳や上出島2号墳出土資料に近い。次に特徴的なものは、第5トレンチから出土した頸部上半から口辺にかけての資料（第19図5）である。外傾しながら立ち上がり、上半で大きく外反する器形である。接合できる資料はないため推測の域を出ないが、胎土・焼成・色調・器面調整などからみると、各トレンチから出土したラップ状に開く口縁部片や胴部片、そして前述の開口底部資料が同資料の各部位になるものと思われる。最後に、問題となるのは突帯部資料である。第2トレンチの2点（第13図4・5）、第6トレンチの2点（第21図2・3）、第2次発掘調

第4章 まとめ

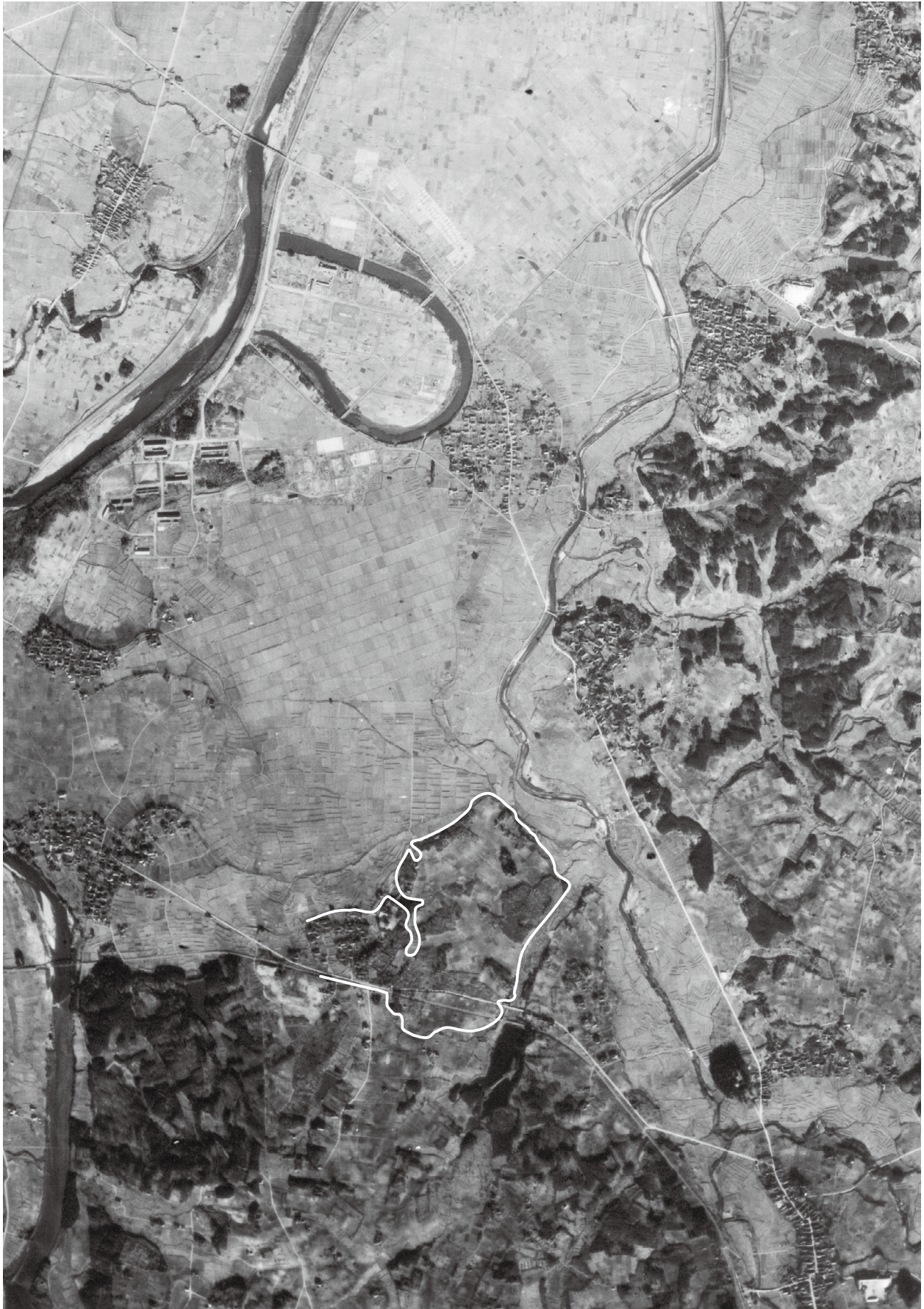
査遺構外出土資料1点(第23図2)、第1次発掘調査出土資料3点(第24図5～7)などがある。これらは、通常の土師器各器種の部位とは考えられないことから壺形埴輪として扱った。類例はほとんどないが、あえて挙げれば埼玉県川輪聖天塚古墳出土とされる2個体の底部穿孔壺がある。実測図のみの確認であるため細部において不明な点もあるが、これらはそれぞれ断面三角形の突帯が頸部に2条貼り付けられており、底部は開口底部らしい。年代的には、中期初頭(大谷 1998)に位置づけられている。

以上のことから、壺形埴輪からみた当墳の年代的な位置づけは、古墳時代前期末葉から中期初頭の幅のなかで築造されたものと想定され、正直古墳群の中では前期後半の前方後方墳と推定されている35号墳と中期中葉以降とされるその他の円墳・方墳の間で、年代的な空白を埋める重要な古墳ということができよう。なお、通常、前方後円墳や前方後方墳などに樹立されることが多い壺形埴輪が、円墳である当墳に樹立された意味については、類例が少なく今後の検討課題である。

参考文献

- 青山博樹 1998 「土器①東北部」『シンポジウム前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 青山博樹 2004 「底部穿孔の思想」『日本考古学』第18号 日本考古学協会
- 梅宮 茂 1964 「正直古墳群」『福島県史』第6巻 資料編1 考古資料 福島県
- 大谷 徹 1998 「埼玉県 前期古墳から中期古墳へ」『シンポジウム前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 大森信英ほか 1976 『上出島古墳群』茨城県岩井市教育委員会
- 金谷克己 1957 「武蔵児玉郡美里村川輪発見の埴輪壺」『上代文化』第27輯
- 菊池芳朗ほか 2014 『団子山古墳1』福島大学行政政策学類・福島大学行政政策学類考古学研究室
- 木幡成雄ほか 2009 『県指定史跡 玉山古墳』いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
- 佐久間正明 2004 「福島県における五世紀代古墳群の研究」『古代』第117号
- 佐藤仁彦・山口正憲 2012 『国指定史跡長柄桜山古墳群第1号墳発掘調査報告書』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- 真保昌弘 1997 『那須八幡塚古墳』栃木県小川町教育委員会
- 田中 裕 2005 「壺形埴輪と東関東の前期古墳」『千葉県文化財センター研究紀要』
- 玉川一郎ほか 1985 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』福島県原町市教育委員会
- 日高 慎・田中 裕 1996 「6. 上出島2号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡Ⅱ』岩井市史編さん委員会
- 日高 慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」『シンポジウム前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 古屋紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』104号
- 柳沼賢治 1997 『大安場古墳群—第1次発掘調査報告—』福島県郡山市教育委員会
- 柳沼賢治・押山雄三・仲田茂司 1991 「郡山市正直35号墳の測量調査」『福島考古』第32号 福島県考古学会
- 吉田博行 1998 『鎮守森古墳』福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- 吉田博行・阿部 司・茶川和久・渡部智子 2009 『亀ヶ森古墳Ⅱ』福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- 吉田博行・阿部 司・渡部智子 2012 『亀ヶ森古墳Ⅲ』福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- 吉田博行・渡部智子 2016 『亀ヶ森古墳Ⅳ』福島県河沼郡会津坂下町教育委員会

写真図版



正直古墳群の位置（国土地理院の空中写真 1947 米軍空撮）

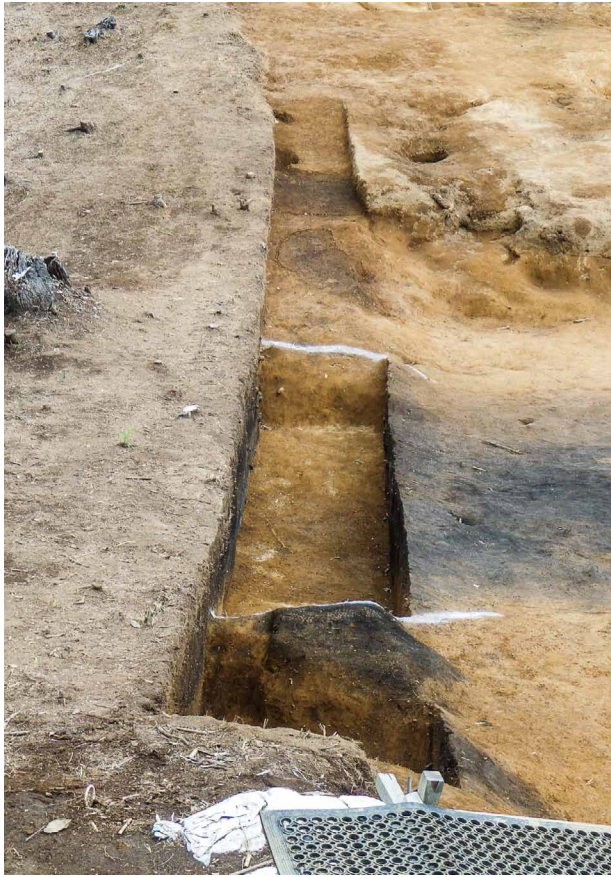
図版2



(1) 正直古墳群・正直B遺跡遠景（南より）



(2) 調査地区全景（上空より）



(1) 第2トレンチ全景 (南西より)



(2) 第2トレンチ周溝断面 (南東より)



(3) 第2トレンチ墳丘面旧表土層 (南より)



(4) 第3トレンチ全景 (北東より)



(5) 第3トレンチ周溝断面 (北東より)



(6) 第3トレンチ周溝断面 (南東より)

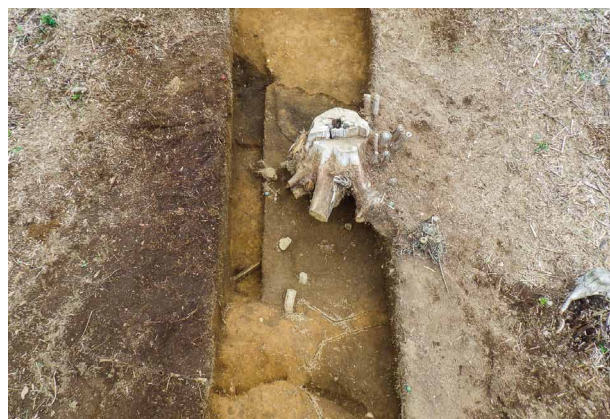
図版4



(1) 第4トレンチ全景 (西より)



(2) 第4トレンチ周溝断面 (南西より)



(3) 第4トレンチ墳丘面旧表土層 (西より)



(4) 第5トレンチ全景 (東より)



(5) 第5トレンチ4号溝跡検出状況 (北より)



(6) 第5トレンチ南壁断面 (北西より)



(1) 第6トレンチ全景 (北より)



(2) 第6トレンチ周溝断面 (北西より)



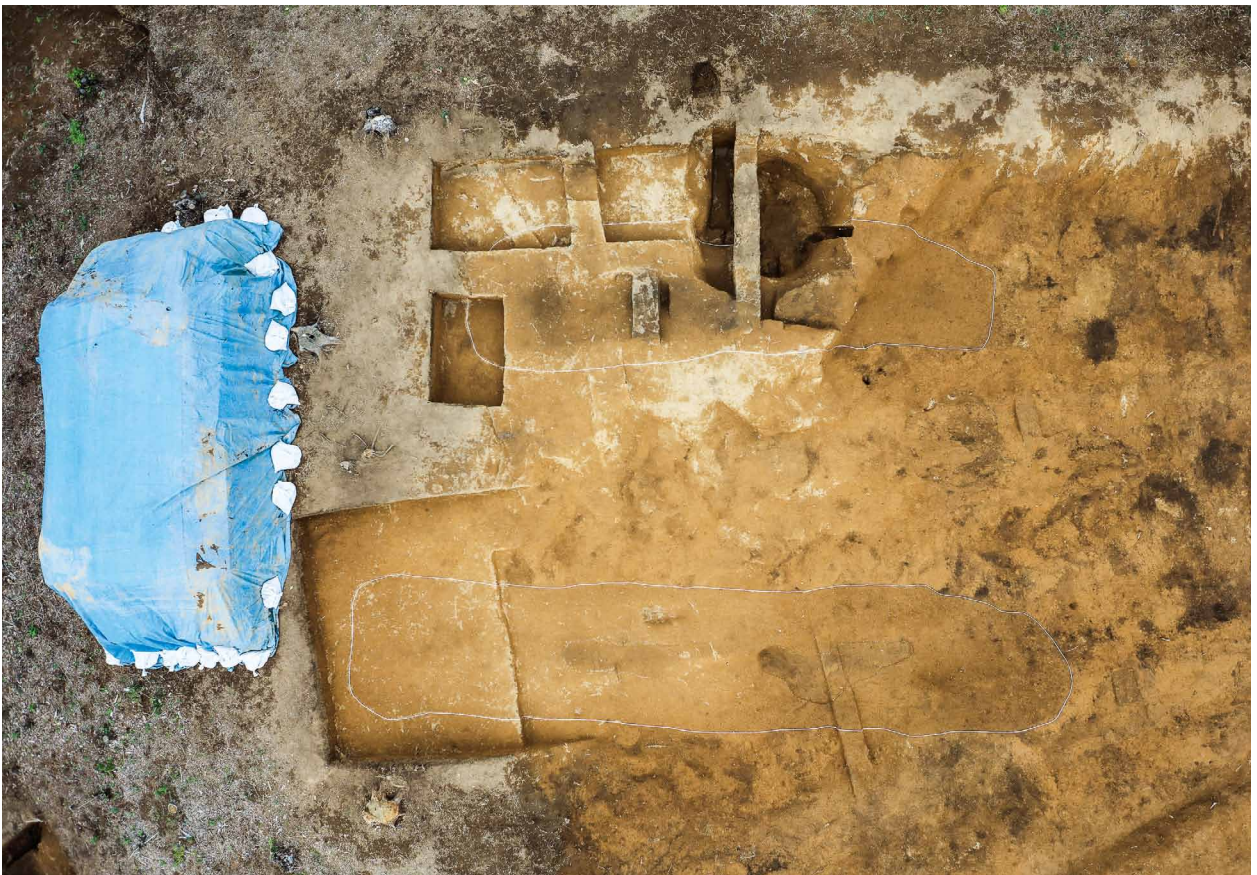
(3) 第6トレンチ墳丘面旧表土層 (北より)



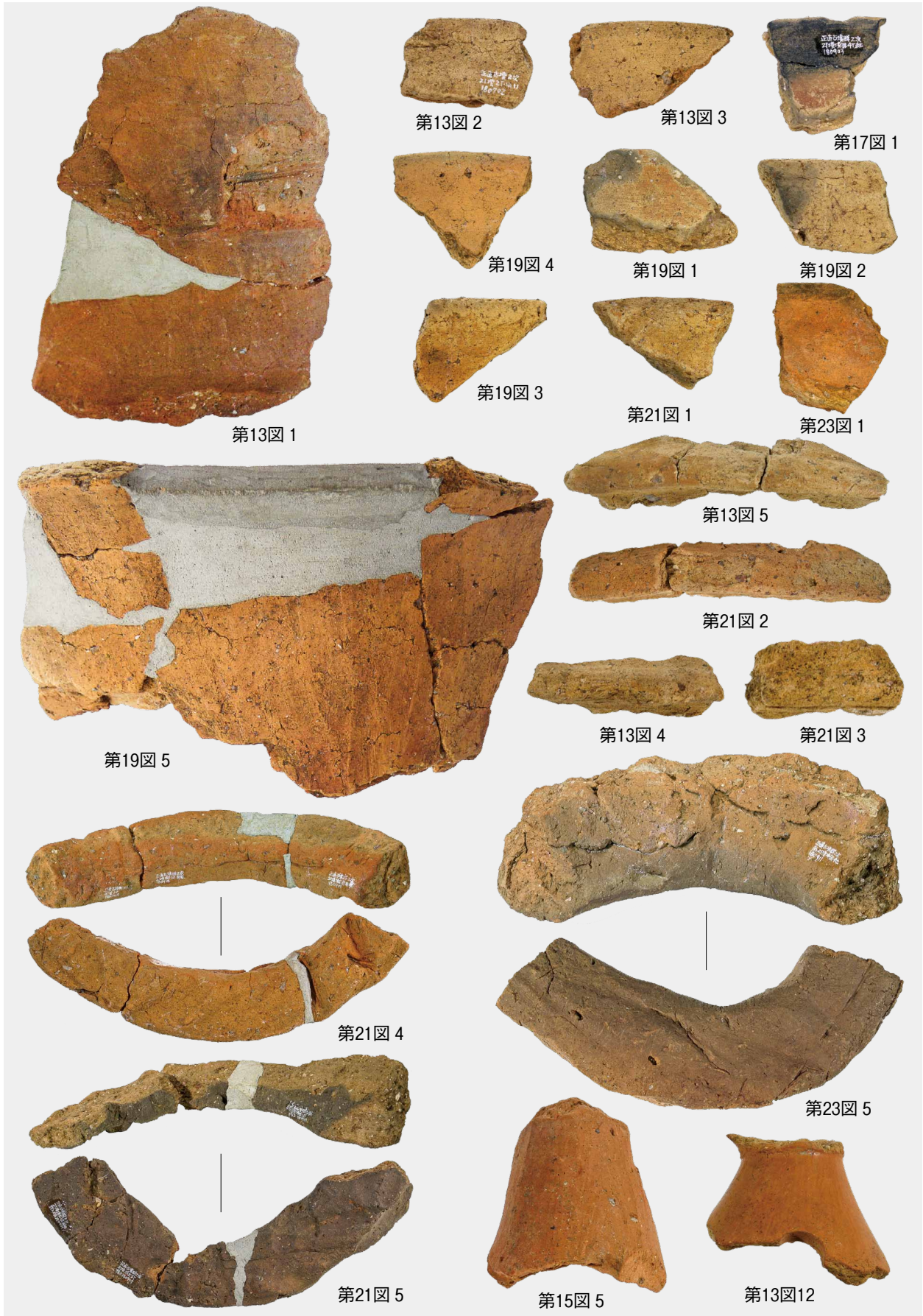
(4) 第1埋葬施設掘方確認状況 (北西より)



(1) 第2埋葬施設掘方確認状況(北西より)



(2) 第1・2埋葬施設掘方確認状況(上空より)



出土遺物 (1)

图版 8



出土遺物 (2)

報告書抄録

| ふりがな | しょうじきこふんぐんーだいにじはくつちょうさほうこくー | | | | | | | |
|---------------------|--|------|--------|----------------------|---|---------------------------|-------------|------|
| 書名 | 正直古墳群ー第2次発掘調査報告ー | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者 | 佐藤常雄 高田 勝 | | | | | | | |
| 編集機関 | 公益財団法人郡山市文化・学び振興公社文化財調査研究センター | | | | | | | |
| 所在地 | 福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田 23 番地 | | | | | | | |
| 発行機関 | 福島県郡山市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 福島県郡山市朝日一丁目 23 番 7 号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2019 年 3 月 22 日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡 | | | | | |
| しょうじきこふんぐん 正直古墳群 | ふくしまけんこむらやまし 福島県郡山市 たむらまちしょうじきあざ 田村町正直字 のどっこ たけのうち 除古・竹ノ内 ほか | | | 37 度 20 分 29 秒 | 140 度 23 分 38 秒 | 20180528 ～ 20180928 | 200㎡相当 | 保存事業 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 正直古墳群 | 古墳 | 古墳時代 | 正直21号墳 | 弥生土器 土師器 壺形埴輪 | トレンチ調査により、正直21号墳は墳丘規模約37m、周溝を含めると約48mの円墳であることがわかった。また、埋葬施設は、長大な掘方が2基見つかったことから、2棺並列の木棺直葬の可能性が高い。築造時期は、出土した壺形埴輪から前期末～中期初頭の可能性が高い。 | | | |

正直古墳群調査保存事業
正 直 古 墳 群
—第2次発掘調査報告—

発行日 平成 31 年 3 月 22 日
編 集 公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀之内字畑田23番地
発 行 福島県郡山市教育委員会
〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目23番7号
印 刷 株式会社 坂本印刷所
〒963-0551 福島県郡山市喜久田町菖蒲池14-26

2019